

愛知における朝鮮学校

——教育と学校生活、参与観察を踏まえて——

山本 かほり

◎本稿について

本稿は2015年9月10日に名古屋地方裁判所に提出したある裁判の意見書に若干の加筆修正を加えたものである。その裁判とはいわゆる「高校無償化」制度から、朝鮮高級学校（全国に10校、以下、朝高）のみが排除されたことを不当として、2013年1月24日に提訴した裁判である。

裁判は、全国5カ所（東京、愛知、大阪、広島、福岡）で行われており、大阪での地裁判決が勝訴（2017年7月28日）したのみで、あとは全て敗訴という結果で進行中である。東京、大阪（高裁で逆転敗訴）は2019年7月28日に最高裁で敗訴が決定、愛知も10月3日に高裁で敗訴。広島、福岡が高裁レベルで係争中である。

朝鮮高級学校のみ無償化から排除するという事は、当時の政府の記者会見を確認すると、「北朝鮮」との政治外交上の問題と関連させていることは明らかである。しかし、裁判では、簡単に言えば、被告＝国は、教育基本法16条の「不当な支配」をもちだし、朝鮮学校が「朝鮮総連（在日本朝鮮人総联合会）の不当な支配」をうけている、したがって、朝高に無償化の適用をすることができないという主張を展開した。

愛知の裁判は、裁判所に朝鮮学校が在日朝鮮人にとってどのような意味を持つのかをじっくりと伝える努力をした。その裁判の流れの中で提出されたのが、この意見書である。

意見書提出から4年を経とうとしているが、朝鮮学校をめぐる状況は改善どころか、悪化の一途をたどっているように思われる。したがって、本意見書を公開し、朝鮮学校が在日朝鮮人の子どもたち、いや、在日朝鮮人たちにとってどのような存在なのかを示したいと考えている。

はじめに

私は社会学の教員として1997年より愛知県立大学で教鞭をとっている。大学院時代から在日朝鮮人と日本人の民族関係に関する研究を行ってきた。特に共同研究で行った「在日韓国朝鮮人の家族親族の世代間生活史調査」（1993年～1997年）およびその後の、同じ対象者へのフォローアップ調査（2009年～2011年）では、在日朝鮮人の生活世界について学ぶことが多かった。

この共同研究は谷富夫（現・甲南大学教授）を研究代表とする「民族関係研究会」（関係研）という社会学者十数名で構成された研究会が実施した。最初は大阪府の委託調査として、後に関係研が引き継ぎ、日本学術振興会の科学研究費補助金（科研費）の助成をうけての研究だった。

本研究では、日本での生活が3世代目、4世代目になり、一見、日本社会に「同化」しているようにみえても、実は、家族親族の中で民族の文化を継承し、その中で民族的な意識が育まれているのだということを学んだ。私たちの研究チームは、個々人の生活史を詳細に分析しながら、いかなる条件の下で、どのような形式と内容において、日本人と在日朝鮮人は結合＝共生関係を結ぶことができるのかということについて考察を行った。その成果は共著書『民族関係における結合と分離』（谷富夫編、ミネルヴァ書房、2002年）や拙稿——「在日韓国・朝鮮人の『世代間生活史調査』——ある家族の階層移動」（谷富夫編『新版ライフヒストリーを学ぶ人のために』世界思想社、2008年）「在日韓国朝鮮人の生活史にみる『民族』の継承と変容」（『社会分析』No. 40, 2013年）「質的パネル調査からみる在日朝鮮人の生活史」（『社会と調査』No. 15, 2015年）などとして発表している。

本調査は、在日朝鮮人社会における家族親族の結合の強さと家族親族が重要な準拠集団になっていることに注目し、家族親族を一つのユニットとした生活史を縦横につながる世代間の比較と連関において考察しようとしたものである。

この調査を企画した谷富夫は、在日朝鮮人の家族親族の結合の強さの理由を(1)儒教精神に基づく家族親族の絶対的強度(祖先祭祀=チェサ)と(2)日本社会に民族障壁が存在するがゆえの家族親族以外の社会関係の希薄さ(相対的強度)の両面から説明できるとする(谷, 2002: 38)。そして、その結合度の高い家族親族内で継承または変容されるものは何か、そのプロセスはどのようなものかを考察する方法として「世代間生活史調査」を考案した。この生活史法は「家族親族のメンバーである個人の生活史」を丁寧に聞き取り、同時に、個々人の生活史を縦・横につながる「血縁・婚姻関係の中に位置づけ」て、世代を超えた長いスパンで「民族関係、文化継承、および職業移動などの変動過程を追求するためのライフコース研究」の一つの方法である(谷, 2002: 39)。

このようにして、生活史を聞かせてもらったのは大阪都市圏に住む在日朝鮮人親族の4親族57名(のべ72回)の方々である。それぞれ親族をV・W・X・Y家と名付けたが、私が主として関わったのはX家であった。1993年から1996年に実施した調査(第1次調査)では、X家16名の生活史を聞かせてもらった。さらに、2009年～2011年に、やはり科研費助成を受けて実施したフォローアップ調査(研究代表:北九州市立大学教授 稲月正)では、さらに4名の生活史を聞かせてもらい、X家では合計20名の生活史をとったことになる。

X家を調査の対象としたのは、第1次調査時には、X家の多くが朝鮮籍を保持し、在日本朝鮮人総連合会(総連)との関係も深く、朝鮮学校に通学経験した者がいる親族であったからだ(他のV・W・Y家はほとんどが韓国籍で、日本学校の経験者のみだった)。今、当時のデータを読み直すと、朝鮮学校の経験に関する言及も多く、現在の朝鮮学校を理解するのにも示唆的な語りも多い。したがって、本論においても、関係研で得たデータも使用した。

さらに、この調査全般を通じて、あらためて、在日朝鮮人の権利、日本と朝鮮半島との関係、日本の植民地責任、戦後責任などについても考えるようになった。その後、大学教員になってからも、在日朝鮮人の権利問題には関心を持ち続けてきた。したがって、本件裁判となっている朝鮮高校の「高校無償化」からの排除問題にも当

初から強い関心を持ち続けてきた。なぜなら、朝鮮学校をめぐる問題、すなわち、JR通学定期券問題、インターハイ等公式試合参加資格問題、大学受験資格問題等がまがりなりにも解決し、朝鮮学校の権利が少しずつ進展していると考えていたので、この無償化からの排除は、朝鮮学校の権利を再び大きく後退させる差別だと感じたからだ。

さらに、無償化問題が長期化し、裁判にまでなっていることは、一方で、私と愛知朝鮮中高級学校との関係を深めさせることになった。さまざまな打ち合わせのために、何度も学校に足を運ぶ中で、私は自然に朝鮮学校の日常生活に触れるようになった。生徒たちは、いつ学校に行っても「アンニョンハシムニカ(こんにちは)」という挨拶で私を迎えてくれる。思春期真っ最中の中級部生徒でも、ぶっきらぼうで不機嫌な表情ながらも、挨拶をしてくれる。難しい時期を過ぎた高級部生徒たちは男女問わず、人なつこい笑顔を見せてくれる。そんな生徒たちの姿は、これまで研究で多くの在日朝鮮人に会ってきたつもりにも新鮮にうつった。私は生徒たちのこんな姿にひきこまれるようにして、朝鮮学校との関係を深めていった。

同時に研究者としても、朝鮮学校の生徒たちの魅力の正体は何だろうか考えるようになった。「なぜ、この子たちはこんなに明るいのだろうか?」という問いが研究の出発点である。「学校が好き」「朝鮮学校を守りたい」と明るく力強く話す生徒たち。生き生きと学校生活を送る生徒たちの姿を目にしなが、「この子たちにとって、朝鮮学校はどのような場なのだろうか?」「この子たちの人生にとってどのような意味を持つものだろうか?」と考えるようになり、その答えを探りたいと考えようになった。

また、財政的に困難な朝鮮学校を物心ともに惜しみなく支える卒業生や保護者たちの姿にもふれ、この原動力は何だろうか?とも考えている。さらに、朝鮮学校で頻繁に耳にする「民族」「祖国」とは何か、その意味は何かという根本的な問いまで含めて、朝鮮学校を内面的に理解したいと考えるようになった。そして、それらの問いの答えを求めて、日本学術振興会の科学研究費基盤研究(C)の助成(研究題目「朝鮮学校における〈民族〉の継承と変容のプロセス」)をうけて、愛知朝鮮中高級学校(以下、愛知中高とする)を中心とした調査を行った。調査自体は助成が終了した現在も継続中である。

主たる調査方法は参与観察である。参与観察はフィールドワークの手法の一つで、対象者と生活と行動をとるにしながら行う調査方法である。「参加しつつ観察する」

方法として、対象者と密接な関係をもちながら調査を行う（佐藤，1992：131）方法で、人類学者や社会学者によって実施されてきたものである。

本研究において、私の参与観察は、2011年9月から基本的には週1回に愛知中高に行き、授業参観を中心にして、ほぼ一日を過ごすというスタイルをとった。私は朝鮮語が理解できるために、参与観察を実施するにあたって言語的な障壁はなかった。授業参観は、授業前に授業担当の教員に許可をもらい、45分間、教室の後ろに座って、授業を見学しつつ、授業中の生徒の様子を観察した。見学する授業科目になんの制限もなく、「民族科目」と類される「朝鮮語」の授業はもちろん「朝鮮歴史」「朝鮮地理」「現代朝鮮歴史」なども自由に見学させてもらった。

休み時間は教員室で教員とも自由に話をし、時には教室に残って、生徒たちとも一緒に話をした。昼食時間も食堂や教室で生徒とともに、昼食をとることも多かった。

このような週1回の学校訪問のほか、学校行事への参加も積極的に行った。運動会、文化祭、授業参観、中級部の修学旅行一部参加（2014年11月）など、学校内の行事はもちろん、全国規模で行われる朝鮮学校行事（中央体育大会、中央芸術競演大会等）などにも参加してきた。そして、高3の朝鮮民主主義人民共和国（朝鮮）への〈祖国訪問〉同行（後に詳述）も3回実施した。

さらには、愛知中高を学区とする初中級学校への訪問を重ね、愛知朝鮮高校学区の初級4年生から6年生の生徒たちが一同に集まって行う2泊3日の「ヘバラギ学園」にもこれまで3回参加させてもらった。2015年度のヘバラギ学園では初級部4年生の児童たちに授業も行った。このような参与観察を通じて、中等教育以前の民族教育についても学ぶ機会を得たと考えている。

また、朝鮮学校出身者、保護者たちにもインタビュー調査を実施してきた。インタビューを行った人の数は合計で31名になる。この過程で、研究成果を日本国内の学会ではこれまで3回、2013年には韓国ソウル大学校での研究会や講義およびニュージーランドで開催された“New Zealand Asian Studies Conference”でも口頭報告を行った。そして、論文としても「朝鮮学校における『民族』の形成」（『愛知県立大学教育福祉学部論集』第61号，2013年）や「朝鮮学校で学ぶということ」（『移民政策研究』第6号，2014年）として発表してきた。さらには、研究エッセイとして「朝鮮学校のフィールドから」（『ソシオロジ』No. 179，2014年2月）のほか、在日朝鮮人を主たる読者とする『イオ』『朝鮮学校のある

風景』等の雑誌にも発表してきた。

本意見書は、これまでの私の研究をベースに、朝鮮学校の生徒、卒業生、保護者など朝鮮学校関係者にとって朝鮮学校がもつ意味を、愛知朝鮮中高級学校での日常生活を描きだすことを通じて、うきばりにしてみたい。つまり、意見陳述で原告たちが「無償化からの除外は私（僕）たちの誇りを踏みにじる行為だ」と何度も述べていたが、そのことの意味を、参与観察、インタビューの記録から描き出してみたい。

さらにもう一つの目標は、朝鮮学校と朝鮮民主主義人民共和国との関係、およびその意味について積極的に踏み込んで描き出すことにある。後に詳述するが、愛知朝高の修学旅行＝〈祖国訪問〉への同行調査の記録から、日本社会では理解されにくい朝鮮学校がもつ朝鮮への愛着の中味について考察を行いたい。

I 「ウリハッキョ」と呼ばれることの意味——「朝鮮学校は私たちの故郷だ」

朝鮮学校でよく歌われる歌に『私たちの学校は私たちの故郷だ』（“우리학교는 우리고향이다”）というものがある。「祖父母が話してくれた故郷にはまだ行ったことがないけれど、僕たち、私たちには故郷がある。それは民族の魂を教えてくれるウリハッキョだ」という内容の歌だ。朝鮮学校のことをよく知らないと、この歌の歌詞がとても感傷的で、朝鮮学校に過度の意味づけをしているように感じるかもしれない。多くの日本人にとって、学校は人生の通過点に過ぎないから、母校や恩師、同級生や同窓生に愛着はあるにしろ、学校を「故郷」などと感じる感性を理解するのは困難であろう。私自身も、はじめてこの歌を聞いた時には、どこか冷めた気持になったことを記憶している。

しかし、朝鮮学校に何度も足を運ぶうちに、上述のようになんか思えなかった私は、朝鮮学校に対する朝鮮学校当事者（生徒、教職員、卒業生、保護者など）の強い思いへの想像力が欠如していたことを自覚するようになった。朝鮮学校は、日本の植民地統治下に奪われた朝鮮の言葉や文化を回復するために、在日朝鮮人たちが自らの手で建てて、そして自分たちの力で70年もの間、維持運営してきた学校である。この間、日本政府はこの朝鮮学校を一度たりとも支援したことはなく、各地方自治体が出してきたわずかな補助金が公的な援助だった。朝鮮学校にはいる「公的」なお金は、朝鮮民主主義人民共和国（朝鮮）が1957年から送ってくる教育援助費・奨学金が、ほとんどの比重をしめてきた¹⁾。したがって、常に財政難に悩まされてきた学校を維持するために、朝鮮

学校関係者が学校に注いできた力は、一般の日本人の想像を超える。「1世の祖父母が作り、2世の父母が守ってきた学校」という物語は朝鮮学校の中では繰り返し語られるが、実際に、生徒たちは、自分の身近な人たちが直接、資金や労力を提供して維持運営してきた学校に通っていることを自覚している。これまでの意見陳述の中でも、原告たちは「私たちは朝鮮学校のことを、愛着をこめて『ウリハッキョ』と呼びます」と何度も述べていた。ウリハッキョは日本語に訳せば「私たちの学校」ではあるが、ウリハッキョという愛称にこめられた愛着は、冒頭の歌の内容にもつながる。

本節では、「ウリハッキョが故郷」だと、当事者たちが語る意味を、私の調査からさらに掘り下げて考えていくことにしたい。

愛知朝鮮中高級学校の現状

まずは、愛知中高の現状を概観しておくことにしよう。愛知中高は学校法人愛知朝鮮学園を運営母体とする中部地区唯一の高級部をもつ中等民族教育機関である。設立は1948年で、2013年には創立65周年を迎えた。学区は、中級部は愛知県内4校の初級学校（名古屋、東春、第七（瀬戸）、豊橋）で、高級部は愛知、岐阜、三重、静岡、長野、北陸の6つの中級部を学区としている。高級部には、自宅から通学できない生徒のために寄宿舎も併設されている。2015年度には26名の寄宿舎生がいる。

創立当初は名古屋市内にあったが、1961年、現在の愛知県豊明市に移転した。1973年には現在の鉄筋5階建ての校舎となった。それから40年以上の月日がたち、建物施設の老朽化は深刻である。予想されている東海大地震などを考えると、生徒たちの安全のために、校舎の建て直しが急務の課題ではあるが、現在の学校の財政状況では困難である。

各種学校認可・学校法人化は1967年、ピーク時には1500人を超えた生徒数も、現在は中級部約100名、高級部約170名で、270名前後を推移しているので、全盛期の約5分の1になっていることになる。それは、少子化による対象者の自然減に加え、日本での生活が4世代目、5世代目となるにつれて、「日本で住むのだから」と日本の公教育を選択する親たちが増えていること、た、2002年に小泉首相（当時）が訪朝し、朝鮮が「日本人拉致」を認めて以来、日朝関係が悪化、それにもない、いわゆる「総聯離れ」が進み、生徒数は減少の一途をたどっている。

また、学校運営の多くの部分を、在日朝鮮人同胞から

の寄付によってまかなってきたが、日本経済の悪化にもない、その額も減り、財政の悪化に歯止めがかからないという。このことは、教職員の待遇に直接的な影響を与えている。十分な給料が支払えない状況が数年続いており、教員数もギリギリの状態です授業や生徒指導をまわしているのが現状である。

しかし、それにも関わらず、生徒たちの学校生活は活発である。授業のほか、ソジョ（小組）と呼ばれる部活動も盛んである。サッカー、ラグビー、空手、バスケットボールなどの運動部、朝鮮舞踊、声楽、吹奏楽、美術などの文化部などがあり、ほとんどの生徒がなんらかのソジョに所属している。ともに朝鮮学校内の大会への参加のほか、日本の公式戦や日本の学校との練習試合、交流会にも参加している。また、部員数不足のため、愛知中高単体ではチームが組めない場合、近隣の日本学校との合同チームを結成して試合に参加している。

さらに、日本の学校で「生徒会」にあたる活動も熱心に行われている。正式には在日本朝鮮青年同盟（朝青）朝高委員会と呼ばれる。全国の朝高の生徒は高校入学と同時に朝青に任意加入することになり²⁾、その役員組織が朝高委員会である。高3を中心に常任委員会が構成され、委員長、副委員長、国際統一部、宣伝部、国語部、学習部、清掃部、風紀部、文化体育部などがおかれている。さらに下部組織で各学級（班とよばれる）にも同じような組織がおかれ、委員たちが役割を果たしている。

卒業生の進路は、朝鮮大学校に3分の1、日本の大学・専門学校に3分の1、その他、同胞企業や総聯の機関を含めた就職が3分の1がここ数年の平均的な割合である。

学校生活

さて、上述のように、朝鮮学校をめぐる状況は大変厳しい。繰り返しになるが、愛知中高の校舎の老朽化は一見してわかる。校舎の外見はコンクリート打ちっ放しで、建設当時としては「モダン」なデザインであったのだろうが、それが「災い」して、たとえば、私の学生たちが授業の一環で愛知中高を訪問した時の第一印象は決して良いとは言えない。「学校までの坂道をあがっていると、突然、灰色の建物が現れた。正直、校舎はボロボロで一瞬怖い気がした」（2014年度・愛知県立大学「社会調査法」レポート）というものが多い。しかし、大学生たちは、校内に入ると、生徒たちのもつ「明るさ」や「人なつこさ」にひかれるようだ。前述のレポートの筆者たちは続けて「一歩中に入ると、生徒さんたちが気さくに『こんにちは』と挨拶をしてくれ、緊張がとけた。

(中略) 学校の雰囲気は、生徒と先生の距離が近く、とても楽しそうにみえた。私たちの高校生活もそれなりに楽しかったが、朝鮮学校での『楽しさ』はちょっと別なものにみえて、こんな学校生活を送れたらいいなとうらやましくも感じた。しかし、なぜ、こんなに学校生活が楽しそうなのだろうか?と書いている。

結論を先取りすれば、その「楽しさ」は、同じ背景をもった生徒、教員、職員、そして保護者たちに囲まれて学校生活を送れる「安心感」にあり、また、そこで培われる「朝鮮人」としての肯定的なアイデンティティに支えられているのだろうと考えている。

『『自分は朝鮮人だ』と人前で堂々と言える子どもにしたいから朝鮮学校にいれた』と保護者たちは異口同音に語る。確かに、生徒たちはすがすがしいほど、すっきりと朝鮮人として生きているように見える。私自身、これまでの研究生活を通じて出会ってきた多くの在日朝鮮人たちの典型的な生活史、つまり、日本の学校に通いながら、朝鮮人である自己を肯定しきれず、悶々とし、「遠回り」をして朝鮮人である自己を肯定するに至るという在日朝鮮人の生活史のモデルストーリーとは全く異なった経路で肯定的なアイデンティティを身につけているのだ³⁾。

朝鮮学校という空間で、自分たちだけの確実なものに守られた安心感が朝鮮学校での生徒たちの「明るさ」の背景にあるのではないだろうか。それは、1980年代の朝高時代をふりかえった二人の保護者の語りにも見ることができる。

A : (1965年生・女性・3世) : 「自分たちがいちばん強いみたい。チョゴリ着ても、今は何かされないだろうか、怯えながら着るっていう感じがあるけど。私たちは、どんなもんだい! っていうぐらいの勢いがあったっていうか。」

B : (1966年生・女性・3世) : 「胸、張って……」

A : 「誇らしく。そこにいると、もっと強くなれるっていうか。なんか、安心感でしょうね。」

以下、学校生活の中で朝鮮学校を特徴づけるものについて述べていくことにする。

1 朝鮮語

朝鮮学校の教育の最大の特徴は朝鮮語による教育にある。朝鮮語は朝鮮学校における公式言語であり、日本語の授業以外は全てを朝鮮語で過ごすことが原則となっている。徹底した「イマージョン教育」(朝鮮学校内では

「運動」として展開され、「ウリマル(=朝鮮語)100%運動」として、学校内の全生活を朝鮮語で送ることも目標としている)で、その成果として、日本語と朝鮮語のバイリンガルをこれまでに多く排出してきた(朝鮮学校創生期には朝鮮語を母語とする教員もいたが、現在では、ほぼ全員の教員の「母語」(第一言語)は日本語である。朝鮮語の母語話者がいない中で、現在に至るまで、継承語としての朝鮮語による教育を行ってきたこと自体、言語教育の分野でも注目されているようだ)。

しかし、朝鮮学校における「朝鮮語教育」の目的は単なる「語学教育」ではない。日朝のバイリンガル排出は結果論であって、朝鮮学校がめざしている本質は、別のところにある。本件弁護団提出の訴状にもあるように、朝鮮学校の起源は、戦後、日本各地に設立された「国語講習所」にある。これは、日本の植民地支配によって奪われた言語、歴史、文化を取り戻すことを目的としていた。つまりは、「朝鮮人としてのアイデンティティ」の回復もしくは獲得を目指したものである。

現在でも朝鮮学校における基本的な教育理念は「朝鮮人としての民族的自覚」の涵養にあり、その必須条件として「母国語(=朝鮮語)を軸とした民族文化への精通」が掲げられている。

要するに、日本においても、確固たる朝鮮人として生きていく力をもった人材を育成することが朝鮮学校の目標であり、朝鮮語教育はその根幹として認識されているのである。「母語」が日本語であるという現実の中で、本来「母国語」であったはずの朝鮮語を習得し、生活の中で使用するということは、日本社会への「同化」を「拒否」することを示す。その意味において、朝鮮語は「抵抗のシンボル」とも言える。朝鮮学校における体系的な朝鮮語教育は、在日朝鮮人たちがその民族的アイデンティティを継承していくうえで、重要な柱であり続けてきたのである。

したがって、朝鮮学校内では、上述したように「ウリマル100%運動」が常に展開され、毎日、一日の終わりに自分の朝鮮語使用率を自己申告する活動が行われている。また、クラス対抗や部活対抗で、朝鮮語の使用率が競われ、学校の中央玄関に目立つようにそれがグラフ化されたりしている。このような強制力がなければ、生徒たちの言語は簡単に日本語にシフトしてしまう。学校の一步外に出れば、家庭生活も含めて、全て日本語の生活になるので、このような強力な教育的介入があって、はじめて、朝鮮語の継承が可能となるのであろう。

もちろん、生徒たちは友人同士では日本語を使うこともある。一般的な傾向として、学年があがるにつれて、

日本語使用率が高くなる。初級部段階では「学校の規則を守る」ことへの拘束力が強いせいか、児童同士でも朝鮮語を使って会話しているが、中高生段階では、休み時間になると、日本語での会話が聞こえてくる。それでも規範としての「ウリマル100%」は生徒たちに染みついていて、あまりに日本語が目立つと、どこからともなく「ウリマル!」と注意する声が聞こえてくること、がしばしばである。学校内で日本語を使用することの「罪悪感」は生徒たちには共有されているようだ。

ところで、朝鮮学校で朝鮮語が同化への抵抗のシンボルであるとともに、朝鮮学校の生徒たちにとっては、「自分が朝鮮人である」という自覚の核心部分にもなっている。日本で生まれ、学校と家庭以外では、「日本」というモノカルチャーな社会で育ちながらも、朝鮮語ができることが自分の「朝鮮人性」の自信となっているようである。以下の語りは、中学まで朝鮮学校に通い、高校、大学は日本の学校を出て、現在はある地方自治体の公務員として働く男性のものである。

「出会ったときに、『私、韓国人です』でね、『民族舞踊、踊れるの?』って聞かれたこともないやろうし。『キムチ食べてんの?』(と聞かれたら、日本人である)『あんたの家はどうなんだ』っていう話だし。あの、やっぱり韓国語ができるかどうかというの、やっぱり、大きいんじゃないんですかね、うん。それが出来なければ、他がどんなに素晴らしかったとしても説得力ってそんな持つんかなーって。うーん、どうしてもこういうこと言っって、『お前は(朝鮮語が)できるからそんなこと言うんだ』って言われたら、もう終わってしまうんだけど、もうホンマにそう思うんだから仕方がないでしょ?って言う——(インタビューア:確認ですけど、実用的に云々ということじゃなくて、もっとこう、アイデンティティの核になるというか、そういうことの方が、やっぱり言葉を学ぶことの意味としても大きかった?)結局、朝鮮学校がなんで朝鮮語だけで授業するのかという、やっぱりそこだと思っんですよね。」(関係研・X14 1975年生、男性・3世)

もちろん、朝鮮語ができなくても「朝鮮人であること」に明確な自覚を持っている在日朝鮮人はいるし、実際、私自身も調査を通じて、そのような在日朝鮮人には多く出会ってきた。しかし、朝鮮学校出身者にとってのアイデンティティの内実とでもいうべきものが「ウリマル(=朝鮮語)」(他にも、クラブ活動を通じて学ぶ朝鮮

舞踊、朝鮮民族楽器、朝鮮音楽などもあるが)であり、自分が朝鮮人であることを証明するものとして大きな役割を果たしているのである。

さらに、朝鮮学校では頻繁に「ウリマルを守る」という言葉も聞かれる。先にも述べたように、歴史的に考えても、植民地支配下で奪われた言語の回復という意味をもつ朝鮮学校での朝鮮語による教育の中で、朝鮮語は「守るべき」ものとして存在する。現在の生徒たちの環境では、学校外での生活のすべてが日本語であることを考えると、朝鮮語(=ウリマル)は守らなければならないものなのである。

たとえば、現在は団体職員として働く卒業生は、朝鮮語に対する意識を次のように語った。

「僕の意識が変わったのは中2の終わり。朝鮮に行く機会があって、ソルマジ(迎春)公演に歌で(行った)。(朝鮮で)歌を習って、先生が『今から歌詞を言うから、それを書きなさい。パダスギ(ディクテーション)』って。それをやったら、朝鮮の人が感動してたんです。ウリマルをちゃんと聞いて、ちゃんと理解して、ちゃんと書ける。ホントにすごいって褒めてくれて。おれらはウリハッキョでちゃんとウリマル使わないと申し訳ないと。そこから変わりましたね。それまで、日本語ベラベラだったんです。要は言葉ではわかってたんです。ウリマルを守らなければいけないというのを。(しかし、明確に)意識として生まれたのは、それがきっかけでしたね。」(1992年生、男性・3世)

また、2012年度の愛知朝高のある教室には「私たちのウリマルは誰が守るのか?日本人だろうか?外国人だろうか?いや、ウリマルは私たちの力で私たちが守らねばならない」というポスターが貼られていた。ここにも朝鮮語による教育、朝鮮語の習得が朝鮮学校の根幹であることが象徴されている。

さらに、どの教室にも「ウリマル教室」というコーナーが作られており、日本語に影響されて間違いやすい朝鮮語、日本語の擬態語・擬声語などの朝鮮語には翻訳しにくい言葉、また最近の日本語表現を朝鮮語で表現する方法などが紹介されている。基本的に、朝鮮学校の教育を担ってきたのは、日本生まれで日本育ちの在日朝鮮人たちであるから、そのプロセスにおいて、「おかしな朝鮮語」「日本語的な朝鮮語」などが形成されていくのは、ある意味、自然のことであろう。しかし、「正しい朝鮮語」を目指して、その習得のため、学校内ではあら

ゆる工夫がほどこされているのである。

こうして、学校内では「ウリマルを守る」「ウリマルで生活しよう」ということが繰り返し、繰り返し伝えられ、生徒たちの内的規範ともなっているのである。以下はそのことを示す出来事である。私のフィールドノートから引用しよう。

「中1の自習時間。生徒たちは彫刻刀を使って、鉛筆たてに思い思いのデザインをしている。生徒たちが作業をしながら、私に話しかける。朝鮮語だったり、日本語だったりするが、私の日本語にひっぱられて、自然に日本語になってしまう。一人の男子生徒がふと、国語部（学級内の委員・生徒たちの朝鮮語での活動を牽引する）の女生徒に向かって『かほり先生は日本人だから日本語でもいいんだよね?』（朝鮮語で）聞く。聞かれた生徒は、肯定できないという表情、しかし、私にも気を遣ったのか、返答しない。聞いた生徒は、独り言のようにして、『いいんだ。かほり先生は日本人だから日本語でいいんだ』と言うが、その後、しばらく私には話しかけてこなかった。」（2012年2月13日 フィールドノート）

ほかにも、朝鮮学校関係の集まりで、その席に日本人がいると、スピーチする人は（朝鮮語で）「今日は、日本の方々もいますので、ここから先は日本語で話します。どうぞお許しください。」と必ず前置きすることもその内的規範を示す一つの例であろう。

ただし、生徒たちは学校の校門を出ると、日本語に切り替える。

「(校門を出て) 坂を下ったところぐらいまで朝鮮語で。誰から(日本語に) 切り替えるみたいな感じで話すんです。電車までずっと(朝鮮語で) つながっちゃうと、やっぱ、周りの目とか、どっかで気にしているところもあるし。おもしろ半分で、多分、遊びで、(日本語への) 切り替え誰がするとか(言う)」(1994年生、女性・3世)

このように、生徒たちが、朝鮮語が公式言語の世界＝学校とその外の世界、つまり日本語の世界を行き来している姿をこの語りからうかがうことができるであろう。

2 カリキュラム

さて、それでは朝鮮高校のカリキュラムはどのようなものであろうか。基本的には、日本の学習指導要領に

表1 愛知朝鮮中高級学校のカリキュラム(2014学年度)

課程(中級部)

学年		1	2	3
授業週数		35	35	35
1	国語	5	5	5
2	朝鮮語文法			1
3	社会	2	2	2
4	朝鮮歴史		2	2
5	朝鮮地理	2		
6	数学	4	4	4
7	理科	4	4	3
8	日本語	4	4	4
9	英語	4	4	4
10	保健体育	2	2	2
11	音楽	1	1	1
12	美術	1	1	1
13	家庭	1		
14	情報		1	1
科目数		11	11	12
週当授業時間数		30	30	30

但し、第二土曜日以外の土曜日には自由研究、課外活動等を行う。

課程(高級部)

学年		1	2	3	
				1、2学期	3学期
授業週数		35	35	24	4
1	国語	5	5	4	3
2	社会	2	2	2	1
3	朝鮮歴史			3	2
4	現代朝鮮歴史	2	2	2	2
5	世界地理	2			
6	数学	4			2
7	理科	3	2	2	2
8	日本語	4	4	3	3
9	英語	4	4	4	4
10	保健体育	2	2	2	1
11	音楽	1			
12	情報	1	1	1	
13	選択科目※		8	7	
科目数		11	必修8	必修9	9
週当授業時間数		30	30	30	20

但し、第二土曜日以外の土曜日には自由研究、課外活動等を行う。

※ 高校2、3学年の選択科目

(2学年) 5時間: 世界史3 + 文系数学2、理系数学5
3時間: 物理3、化学3、生物3、情報処理B2 + 音楽1、英会話2 + 音楽1

(3学年) 4時間: 文系数学2 + 簿記2、理系数学4
3時間: 物理3、化学3、生物3、情報処理B2 + 音楽1、英会話2 + 音楽1

※ 高校3学年はその他80時間

1学期——修学旅行(祖国訪問)及び前後の講習2週間(60時間)

3学期——就職ガイダンス、入試補習1週間(20時間)

(『民族教育について—愛知朝鮮学園に対する理解を深めるために—』愛知朝鮮学園 2014年7月より抜粋)

従ってカリキュラムは編成されている。具体的な科目名や時間数は表1を参照してほしい。基本的には、日本の学校と同じ科目が並ぶが、特徴的なのは民族科目と呼ばれる国語（朝鮮語）、朝鮮歴史、現代朝鮮歴史（中学段階では朝鮮地理）が設置されていることである。これも朝鮮語教育と並び、植民地支配によって否定され奪われた歴史と文化の「回復」には不可欠な科目である。

教育内容は、現在では「日本で生まれ、日本で永住することを当然のこととしつつ、日本の社会において朝鮮人として正々堂々と生き」（『民族教育について—愛知朝鮮学園に対する理解を深めるために—』）ていくことができる人材の養成に主眼がおかれているという。

朝鮮学校の教科書は全国統一で、教科書を出版する学友書房の教科書編纂部、朝鮮大学校教員および各朝鮮学校教員たちから構成される「教科書編纂委員会」がカリキュラム編成と教科書編纂を行っている。

板垣竜太は、朝鮮学校の教育課程や教科書は、在日朝鮮人社会の変化に対応して改訂されてきたとし、総聯結成の1955年以降に限っても、大きく3期に分割できるとして、以下のように分類している（板垣, 2013）。

第1期＝1955～1973年：総聯結成から1974～77年の改訂以前の時期

第2期＝1974～1992年：1974～77年の改訂及び1983～85年の改訂の時期

第3期＝1993年～現在：1993～95年の改訂および2003～06年の改訂の時期

そして、第1期、第2期と第3期への転換となった1993～95年の教育課程の改訂では、大きなカリキュラム上の変化があり、教科書も全て一新されたと指摘している。第2期においては、ちょうど、第1期の半ばから第2期の初期まで、朝鮮学校で教員を務めた男性は、その変化について、次のように指摘する。

「(1960年代の私の教員時代は)教科書の内容が、文系の教科書は、全部、政治色がスパーンと入ってくるわけですね。(しかし)私の孫が、(2000年代には)いて)名古屋初級学校に通い始めて、授業参観して教科書を変えたってということで、見たら、明らかに変わってますね。自然な、ホントに自然な教科書に変わってますね。これならホントの民族教育だ(と思った)。」(1940年生、男性・2世)

また、第2期に朝鮮学校での教育を受けた卒業生たちも、当時の教育について次のように振り返る。

「子どもの頃には(学校で教わることに違和感)はなかったですね。高学年で「革命歴史」っていうの(教科)がでてきた。金日成さんの小さな時から、どんなふうに育ったかいうのを習って。それだけを掲げている教室もあって、赤いベルベットの生地がひいてあって。銅像がかかかってあって、その教室の前を通るときには必ず頭を下げなければいけないとか。今は変だなあと思いますが、当時はそれが当たり前で、尊敬もしていたし、ありがたいと思っていたんですね。」(1964年生、女性・3世)

そして、現在はもう少し「冷静に」朝鮮のことを見ているつもりだが、しかし、当時の教育は自分の根の部分で残っているという。

「(当時の教育は)今も残ってるし、今も子どものころ習ってた『ナラ～エソ～』(나라에서=国からという意味。つまり、朝鮮から教育援助費が送られてきたことを歌った歌)⁴⁾って歌、あの歌、自分で歌いながら泣いちゃう。それは取れないと思う。」(1964年生、女性・3世)

他の保護者たちも、個別の体験は異なるが、ほとんど同じようなことを語る。当時は学校の言うことが正しいと思っていたし、朝鮮のおかげ(前述の教育援助費・奨学金のおかげという意味)で自分たちはこうして学ぶことができる、その意味で朝鮮＝祖国に感謝している、今になってみると、学校で教わったことについて、おかしいなあとと思うことはあるけれど、それでも教育の根底に流れていたものは自分の中に根付いている。盲目的には従うつもりはないが、金日成への尊敬や感謝の念は今でも変わらない。日本人からみたらおかしいと思うかもしれないけれど、この根底にあるものは変えようもないし、生前の金日成の姿をみると自然に涙がでてくる自分たちがいる、今では、韓国にも行くようになったが、韓国は「海外旅行」として楽しみに行くところであり、朝鮮が持つ意味とは全く異なるという具合だ。

それでは、現在はどのような教育が行われているのだろうか。以下、各民族科目の特色について、概要をみておくことにしよう。

朝鮮地理(中級部)は文字通り朝鮮の地理で、南北朝鮮に関することを教える。その世界観は北側の朝鮮民主主義人民共和国に焦点がおかれたもので、首都は平壤、ソウルは南朝鮮の「中心都市」という扱いである。つまり、南北朝鮮に二つの国家があるという視点ではなく、

あくまでも正当な国家は朝鮮にあるという立場である。しかしながら、全体的な内容は南北各地域、風土、産業などをまんべんなく扱い、その記述に偏りはない。

朝鮮歴史は古代から1910年（韓国併合）までに関する教科である。その歴史観や用語は朝鮮のそれに従ったものとなっている。

さらに、本件に関わり文部科学省などが最も「問題視」した科目が現代朝鮮歴史である。「無償化」の適用をするか否かという審査の過程で、文科省はこの科目の教科書の内容について踏み込んだ「確認」をし、また、実際に各朝高を訪問し、この科目を指定して参観をした。もちろん、朝鮮半島の南北分断以降を中心に扱う科目でもあるので、南北の歴史観の相違が最も鮮明にできる科目である。そして、当然のことながら、朝高の教科書の記述は朝鮮の立場にたっている。教科書の内容は、高1では1945年8月から1953年7月までを扱う。つまり、(1)解放から朝鮮戦争に至る経緯 (2)朝鮮戦争（「祖国解放戦争」と朝鮮では呼ばれる）である。高2では1953年8月から1980年までについて教える。朝鮮の社会主義国家建設のプロセス、韓国での軍事独裁政権時代に関する内容、それに抗する民主化運動などである。そして、高3では、1980年から現在までに関する内容を扱っている。そして、同時に在日朝鮮人運動史もあわせて教えている。

その教育内容には、たとえば、金日成の抗日闘争に関する記述の一部や朝鮮戦争が起こる経緯の記述に、現在の歴史学や政治学では疑問視されている内容も含まれている。しかしながら、それについては、各教員が授業内で「これは一つの見解であり、異なったものもある」と言って補足説明をしている。そのような場面は、参与観察で授業見学をしている過程で何度も目にしている。

また、この現代朝鮮歴史において、朝鮮の指導者を「個人崇拜」している等の批判⁵⁾もあるが、金日成が抗日闘争を率いた朝鮮人指導者の一人であることは事実であり、朝鮮のために命をかけた人物であることは紛れもない事実である。また、教科書で使用される朝鮮の指導者に対する「偉大なる」「敬愛する」等の形容詞がつけられていることを、ことさら強調し、「指導者を礼賛する」と主張するものもある⁶⁾。しかし、朝鮮学校での日常を参与観察している私からみると、これらの指摘は的外れであるように思われる。もちろん、「祖国」とし「正当」とみなす朝鮮民主主義人民共和国の指導者に、学校の教育の中で親愛の情を示すことはある。指導者への呼称は本国でのそれをならったものであり、これらを踏襲することは、朝鮮学校が持つ公式の立場への「折り

合い」の付け方とみなすことができるのではないだろうか。朝鮮の場合、その政治社会体制を鑑みると、指導者への尊敬や敬愛の情を表現するという形で、「祖国」への情を示すのである。そして、その距離は生徒個人々人で様々ではあるが、決してそれを全面否定はしないし、だからと言って、全面的に肯定するわけでもない。生徒たちは、生徒たちの日常に即して生徒たちなりの理解をしつつ、受け入れているのである。

このことは、朝鮮学校出身者によるエッセイ『朝鮮高校の青春—ボクたちが暴力的だったわけ—』（金漢一、2005）や『九州コリアンスクール物語』（片宮泰、2006）などにも、おもしろおかしく紹介されている。決して、生徒たちは、学校での教育に盲従しているわけではないのである。日本で生まれ育ち、学校外からも様々な情報が入る環境にいる生徒たちを教えるという現実。このような現実の中で葛藤を経験しながら、朝鮮学校のカリキュラムも変遷してきたのである。

さらには、板垣も指摘しているように、金日成が1945年以降の朝鮮の歴史を理解する上では本質的な人物であり、また、同時に、在日朝鮮人の一世たちにとって、金日成に関する様々なエピソードが日本で生きていく上で希望をもたらすものであったことも理解する必要がある。「『記憶の場』としての金日成の存在は、少なくとも今日の日本人が皮相的な知識で単純に断じ得ないものがある」（板垣、2013：159）ことは、認識しておく必要があるだろう。

さらに、現代朝鮮歴史において、「拉致問題」やいわゆる「大韓航空機爆破事件」（1987年）が「歪曲」されて記述されているとの指摘もある。しかしながら、「拉致」は「許されないこと」とであるという見解と同時に、その後、日本社会に吹き荒れた「北朝鮮バッシング」を鑑みると、在日朝鮮人社会が困難な状況に陥ったことは事実であり、それについて記述することは何ら問題がないと考える。また、「大韓航空機爆破事件」についても、韓国政府の見解とは異なる見解を示す力がいまだ韓国内に存在⁷⁾するし、朝鮮の立場からすると、この事件を「南朝鮮旅客機失踪事件」と呼び、それについて朝鮮の見解を記述することが、大きな問題だとは思えない。この項目を扱った授業を何度か観察している（うち1回は対外公開授業であった）が、教員は教科書に書かれていることを説明しつつ、「しかし、いまだ真相はわからない」と補足し、韓国側の公式見解も紹介していた。この事件一つとっても、生徒たちを取り巻く環境は、校外では韓国の見解を支持する情報一色なわけで、学校もこのような現状の中で、様々な観点を生徒たちに提示する努

力を続けているのである。

朝鮮現代歴史という科目が持つ重要な意味は、日本の植民地時代の歴史を学ぶことを通じて、生徒たち自身に、自分たちがなぜ日本にいるのかということを確認に理解させることにもある。また、金日成を中心とした抵抗と闘いの歴史は、朝鮮学校の生徒たちにとっては、現在まで日本社会で続く差別への抵抗の原動力ともなっているようである。このような歴史は、歴史科目のみならず、国語（朝鮮語）の教材（文学作品や随筆）でも扱われる。学校での民族科目を通じて、生徒たちは、日本の植民地支配、その後の分断状況について学び、それらの不条理を確認しつつ、自分たちが日本で朝鮮人として生きていく権利を明確に意識するようになっていくと思われる。

もう一つ、繰り返し、確認しておくべきことは、朝鮮半島が現実に分断されている中で、その歴史がある種の政治性とイデオロギーをおびて描かれるのはやむを得ない側面があり、また、どのような立場で教育をするかということは、教育を行う主体にゆだねられるべきであるということである。朝鮮学校に対してのみ、日本社会の「反北朝鮮感情」におもねるようにして、教育内容に、政府（行政）が踏み込むこと自体の危険性を認識する必要がある。

3 行事

朝鮮学校には行事が多い。学校内はもちろん、在日朝鮮人社会内や対外的な行事も含めて、規模や形式は様々であるが、行事は頻繁にある。授業や部活動と並んで、朝鮮学校の教育の中では大事なものと位置づけられている。

在日朝鮮人社会内、全国に広がる朝鮮学校コミュニティ内の行事は、例えば、中央体育大会（運動部の全国大会）や中央芸術競演大会（舞踊、声楽、吹奏楽などの芸術部の全国大会）などを中心にして、熾烈な闘いが繰り広げられる。これらの全国規模（または地域規模）の大会は初級部の頃からあり、それぞれの技術を切磋琢磨する機会であるのはもちろんのこと、全国の朝鮮学校生に出会う貴重な機会ともなっている。前にも述べたとおり、児童生徒減少に悩まされる各朝鮮学校では、全校児童生徒数が一桁から20人未満の学校も決して少なくない。同級生が不在、いても一人などというケースも決して珍しくない中で、教育をうける児童生徒たちにとっては、多くの仲間たちに出会い、全国に友人を作る、しかも同じ部活（サッカーや舞踊など）で頑張る友人を作る大切な機会ともなっているのだ。

また、学校行事も単なる行事をこえて、地域の在日朝鮮人コミュニティのお祭りの要素をもつ。例えば、運動会がそうだ。生徒たちにとって、大事なイベントである。特に高3は運動会に高校生活のすべてを結集させてのぞむ様子うかがえる。行進や競技の練習に余念がなくなるのはもちろんのことであるが、放課後に何度も生徒集会を開き、「運動会を成功させよう！」とシュプレヒコールをあげる。それには必ず「ウリマルをきちんと使って」とか「同胞のために」という言葉がついている。

また、運動会の日が近づくと、生徒や教員たちのみならず、保護者たち、卒業生たちも、熱心に運動会への参加を私に呼びかける。このある種の「熱狂」ぶりは、日本人で日本の公教育をうけてきた私には理解が難しかった。そもそも、多くの日本人の感覚では、中学や高校の行事に親が来るなどということは、あまりよくわからない感覚だったのだ。「親が学校に来ないでほしい」という感覚を私たちの世代は持っていたからでもある。

したがって、生徒たちのシュプレヒコールの意味も、そして運動会自体が朝鮮学校コミュニティにとってもつ意味もよくわからなかった。しかし、運動会当日の朝9時過ぎに、学校に着くと、すでに地域ごとに用意されたテントに保護者たちが席をとっていた。各地域からバスを仕立てて、保護者のみならず、祖父母、また初級部の児童たちも来ていた。また、もう子どもは愛知中高を卒業したという元保護者、子どもは愛知中高に通っていない卒業生も含めて、愛知中高校区の在日朝鮮人たちが一同に会する場となっていた。そして、「なるほど、これが同胞のためにと生徒がシュプレヒコールをあげていたことの原因か」と思ったのである。

どの競技も見ていて楽しいが、朝鮮学校ならではの感じるのが高級部男子の障害物競走と中3、高3の生徒たちが家族と一緒に走る競技だ。障害物競争の目玉は高い壁を乗り越えるところだろう。高1では十分に身体ができていなかったために、何度も失敗していた生徒が高2、高3では楽々越えていく。運動が苦手な男子も当然いるから、高3になってもなかなかうまく越えられない生徒もいる。失敗を重ね、ようやくよじ登るようにして超えていく姿には、オモニ（母親）たちや見ている生徒たちとともに精一杯の声援を送った。朝鮮学校には「マッチョ（男らしさ）」なるものに対するある種の「尊敬」と「憧憬」が存在すると日々感じるが、でも、実は、決して「マッチョ」にはなれない仲間たちにも、温かいまなざしを向ける余裕があるのだ。また、幼少期から知っている生徒たちを、学父母たちが自分の子どもの

ように応援する姿も朝鮮学校ならではの風景に思われる。

また、卒業学年の生徒とその家族がともに走る競技も朝鮮学校の運動会の風物詩だろう。家族が待つところまで生徒たちが何人かで走ってきて、家族の前で、これまでの感謝を口にする。そして、ある生徒はオモニを抱き上げたり背負ったり、逆にアボジ（父親）が娘を抱きあげたり、または、家族全員で二人三脚のように走ったりする。オモニたちは大喜びだ。日常生活では、ぶっきらぼうな態度を示す息子に抱き上げられ、保護者たちは心から喜んでいる。この競技も、最初は違和感を感じたものだ。この年代の中高生が保護者に示す情があまりにも素直に感じたからだ。

しかしながら、私自身、調査を通じて、子どもを朝鮮学校に送る親たちの「意地」を実感するようになり、この競技の意味がわかるようになった。初級部から朝鮮学校に子どもを送ることは、経済面のみならず、バス・電車での通学、学校支援のための様々な活動等、多くの負担があることは、この数年、朝鮮学校に関わりながら知ったことだ。1970年代～80年代にかけて、4人の子どもを朝鮮学校に送ったある母親の言葉が象徴的だ。

「規模は小さいし、学校は小さいし、頼りないし。（しかし）やっぱり批判する前に、自分が子ども入れると一生懸命良くしていかなあかなくてということになりますから。それで、私らの学校は、親も子どもも、一生懸命、一緒にして大きくならないとあかんと思いました。」（関係研・X2 1943年生、女性・2世）

このように、朝鮮学校は発足当時から現在に至るまで、在日朝鮮人たちの手によって、多くの困難の中で維持されてきた。在日朝鮮人たちの日本での永住が前提となった今でも、朝鮮人および朝鮮語による朝鮮人のための民族教育を行う朝鮮学校は、日本への同化への抵抗の象徴的な存在である。その意味においても、朝鮮学校は在日朝鮮人自身の運動によって、設立、維持運営されてきた学校なのである。

その意味において、今でも生徒たちが頻繁に口にする「ウリハッキョを守る」という言葉は、その歴史性と特殊性においても、単なるスローガンではない。したがって、運動会のような在日朝鮮人たちが一堂に会する機会は、生徒たちにとっても「同胞との一体感」を体験する場となるのである。そして、そのコミュニティの核となっている学校を守っていかねばならないという意識が形成されていくようである。

朝鮮学校の行事、特に運動会には、朝鮮学校の全てが凝縮して体现されるようだ。かなり「マッチョ」なところ（つまりは「男は男らしく、女は女らしく」が実践されている）、家族主義（在日朝鮮人が日本社会で受けてきた処遇を考えれば当然の帰結だろう。「対外排除は対内結束に比例する」）、そして、朝鮮学校のスローガン「一人はみんなのために、みんなは一人のために」の実践の場でもある（もちろん日常でも行われるが、運動会では特に強く出るように思われる）。運動会を通じて、学校は生徒たちの「団結心」を育成しようとしているのだろう。その「団結心」は学校内の生徒のみならず、「同胞との一体感」だ。この「一体感」は抽象的なものではなく、運動会という「場」では、具体的なものとして体験され、その核となる学校を守っていくという意識が生徒たちの中に育つように思われる。生徒たちがよく公式の場で言う「同胞社会」「在日朝鮮人社会」というものが、単なる抽象的な概念を超えて、実体的な「コミュニティ」として実践される機会が運動会であり、だからこそ、学校も単なる学校行事をこえた同胞たちの一大行事として運動会を捉えているのだと、今のところ、理解している。

さらに、生徒たちは、基本的に行事が大好きなようだ。「僕ら、みんなで集まって騒ぐの大好きですから」という言葉のもつ意味、これは、朝鮮学校が在日朝鮮人たちにとって、コミュニティの核となっており、日本社会においても在日朝鮮人たちが朝鮮人として集まり、そして気兼ねすることなく、ともに時間を過ごすことができる場となっていることも示唆しているように思われる。

保護者たち

ところで、朝鮮学校での調査を行っているとき、保護者たちの学校への関わり方の深さにすぐに気づかされる。学校行事、生徒たちの部活動、校舎の整備等、あらゆる場面で保護者たちが熱心に学校に関わるのである。さらには、高校無償化適用実現のための街宣活動、署名活動なども積極的に展開する。日本の高校のPTA活動にも熱心に関わり、同年代の子どもを持つ親たちとの連携を持つ努力を続ける。

このように保護者たちが学校を支えようとする原動力は何だろうか？ 保護者たちと話す機会があると、みな朝鮮学校の将来を心配し、そして、何とか学校だけは守らなければならないと話す。これだけ日朝関係が厳しく、朝鮮学校や総聯への日本社会からの風当たりも強い今日、なぜ子どもたちを朝鮮学校に送るのであるだろうか？

保護者たちのほとんどは「当たり前之选択だった」と語る。私がインタビューをした保護者は22名、うち、1人が日本の学校での教育を受けた人であった。また、2名を除いて（1名は初4で編入、もう1名は高級部から編入）、初級学校1年生から朝鮮学校での教育を受けた。

保護者たちは朝鮮学校に送ることの「当たり前さ」を次のように語る。「子どもを朝鮮学校に入れるのが当たり前だと思っている人と結婚しようと思っていたし、結婚後、家を探すときにも、子どもが朝鮮学校に通えることを第一条件に探した」（1964年生、女性・3世）とか「チョソンサラム（朝鮮人）だから、チョソンサラムとして育てるためには、ウリハッキョしか考えられなかった」（1965年生、女性・3世）などと理由を説明する。

「(日本社会の朝鮮に対するまなざしは) 考えますね。だけど、今だからこそ、朝鮮学校に行かせる意味があるのかなって。そういう条件的なことを言えば、日本学校に行かせるほうが、親はよっぽど楽だし。じゃあ、その子の人間形成上、日本学校に行くことがこの子どもたちにとって良いことなのかってなると、そこらへんは日本学校では絶対教われないものをウリハッキョは教えてくれるし。やっぱり、朝鮮人としてっていう、そこですね。いくら日本人になろうとしても、私たちは日本人になれないし、だったらもっと堂々と朝鮮人として、生きる道、そっちを選ばせてあげたいというか、そっちを進んでほしい。それを教えてくれるのは学校しかないし。(家庭だけでは限界が) あると思いますね。そこに仲間がいるというのがね、大きいし。」(1965年生、女性・3世)

また夫婦ともに日本学校出身であるひとりの保護者(1968年生、女性・3世)は、子どもが生まれたら朝鮮学校に入れようと考えていたといい、その理由を次のように述べる。ちなみに、彼女は、高2の時に在日朝鮮人たちが集まるサマースクールに参加したことがきっかけで、自分の民族性に目覚め、朝鮮人として生きていくことを決めたという。サマーセミナー参加をきっかけに、本名を名乗りはじめ、その後、在日朝鮮人の学生や青年たちの活動にのめりこんだという。その活動を通じて、知り合った在日朝鮮人男性と結婚、5人の娘をもうけ、5人全員を朝鮮学校に送っている。

「(子どもは) 絶対的に朝鮮語を覚えなければならないと思っていたので。自分たちが使えないし、歴史をあまりにも知らなかったの。自分の国の歴史、自分の

国の言葉は絶対に覚えなないといけなないと思っていたので。それをこの子たちが学べるんだということがすごい嬉しかったです。(中略) 歌、地理、いろんなことが自分の国の言葉で自分の国のことを勉強するんだということがすごく嬉しかったですね。」

中島智子も朝鮮学校の保護者へのインタビューを通じて、私の調査と同様の結果を導きだしている。朝鮮学校出身者は「当たり前之选択として」「安心できる場所」として朝鮮学校を選択し、日本学校出身者は自身が民族的アイデンティティの葛藤をした経験から、子どもには朝鮮語や文化などを自然に習得できる朝鮮学校を選んだという(中島, 2011)。中島の調査での「安心できる場」というのは、朝鮮人同士のつながりのある場を意味しているようだ。私のインタビューでは保護者たちは次のように語る。

「(朝鮮学校での) 絆がしっかりしてれば、社会に出て困難なことがあった時にでも、頼れたり、力をもらえたりっていう。自分が『素』に戻れるところに、いつでも帰れるような場所を作る」(1965年生、女性・3世)

「(学部は) どこ行くにしろ朝鮮大学に入ってほしいと思いましたね。そういう朝鮮人のコミュニティっていうか、それもすごい私は重要視しているの。私はね、学歴はね、あまり当てにならないなあと思っているんだ」(1953年生、女性・2世)

つまり、朝鮮学校で形成される人間関係をベースに在日朝鮮人コミュニティに居場所を作ってほしいと願っているのである。在日朝鮮人の世代が進む中で、日本社会の中では在日朝鮮人同士が朝鮮人として出会うことすら難しいという現実がある。それは、日本社会の中では、朝鮮人は見えない存在にさせられているからである。このことは、当然、個人の民族的アイデンティティに影響を及ぼす。日本の学校に通った在日朝鮮人たちの生活史には、「朝鮮人であることを周囲に知られたくなかった」とか「朝鮮人であることを友人に伝えるべきか」とか「朝鮮人であることを思い切って話したのに、『別に関係ないよ』と言われて傷ついた」というような語りが頻繁に出てくる。朝鮮学校では、少なくともこのような葛藤は経験せずに、同じ歴史的背景をもった在日朝鮮人たちが朝鮮人として教育をうけることが保障されている。保護者たちは、このような場の確保を重視して、子どもた

ちを朝鮮学校に送っているようだ。

しかしながら、一方で、保護者たちの負担は相当に重い。まずは、経済的負担。義務教育相当年齢から授業料や通学費がかかる。平均すると一ヶ月2万5千円程度だという。高級学校では、一般的な私立高校と同程度で月平均4～5万円だという。

また、地方の朝鮮学校では初級部1年生から遠距離通学となる。例えば、長野の朝鮮学校は松本市内にあるが、児童生徒は上田市周辺、長野市周辺から通学する。上田からはスクールバスが運行されているが、片道50キロ、経費節約のため一般道で往復するために、1時間半から2時間の通学路である。長野市からは特急を使って通学している。子どもの負担も大きい、親の精神的な負担も小さくない。

「息子は車酔いするんです。最近慣れてきましたが、最初は、行きも帰りも吐いて。ぐったりして帰ってくる子どもをみて、朝鮮人にするために、こんな目に合わせるのは親のエゴかなって思ったりもします。」
(1976年生、女性・3世)

その他、先にも述べたように、保護者は学校を支えるための活動にも積極的に関わる。慢性的な財政不足に悩む学校のために、行事のたびに売店を出し、その売り上げを学校に寄付するオモニ（母親）会。校舎の補修、修繕なども父親を中心とする保護者たちの手によって行われる。仕事をしながら、このような活動に参加するのは相当な負担のはずである。それなのに、学校を支え、子どもたちに民族教育を受けさせたいと奮闘する背景には、保護者たち自身の学校体験がある。

初級学校4年生から朝鮮学校に編入した女性（1964年生、女性・3世）は、朝鮮学校での初日の経験を次のように語る。

「今でも覚えてるんですけど、学校のバスが、朝、来ました。母がそこまで送ってくれました。弟と手をつないで、入学式だったんです。学校に行きました。そうしたら、みんな、チョゴリを着てますよね。真っ白の校舎で、2階建てで、窓の所に鉄棒があるんです。そこがちょうど鉄柵になって、みんながこっち覗いて、手を振ってくれる。だれも知らないのに、こんなに温かく迎えてくれるんだーという感じで。小学校にだいたい40人ぐらいいたのかな。みんながね、すごく優しいというのか、うん。そのとき思ったのが、ここ、私がいる場所だっという感じがしたんですよ。」

彼女は日本の学校で特に差別体験があるのではない。むしろ、経済的には裕福な家庭に育ったので、周囲の日本人からも一目おかれていたという。しかし、日本の学校に通いながら「何か違うな」という感覚だけは持っていたという。「何かわからないけれど違う」という感覚の「何か」は朝鮮学校に行ってみるとも語る。

「何かが違うというのは、このことだったのかなあって気づいたんです。自分で。だから、よく言うじゃないですか。水を得た魚、そんな感じなんですよ。あと、私が居れる場所がある、私が居れる場所がここだという感じで。なんか涙みとったというか、感じ取ったというのか。」

つまり、日本の学校では、周囲の日本人と自分は違うということ＝朝鮮人であることを肯定的には受けとめることができずに、違和感を感じていたが、朝鮮学校に編入して、その感覚から解放されたのである。

また、どの保護者も楽しかった学校生活を語る。

「(学校は)パラダイスみたいなところでしたよね。楽しいし、やりたい放題で。先生とも基本的に仲いいし、友だちとも仲が良かったし。付き合いが濃密なので。充実してるっていうか。学校に来なかったら、女の子だったら、家に行って。私も行きましたよ。3日も休んでる子呼びに。出席率100%運動とかやるんです。100%運動、あと、10日で達成なのに、休んだりするヤツがいて、電話しても出ないっていうんで、友だちと一緒に行って、あいつを明日連れていくよ、みたいな感じで。私も、それで行ったんですけど、夜、遅くまでいて、その子の家に泊って、夜通しおしゃべりして、私も寝坊して、休んじゃったんですよ。」(1960年生、女性・2世)

ほかの保護者たちの体験談も類似のものが多い。学校の勉強はともかく、仲間たちと一緒にいるのは楽しかった、学校が好きなので夏休みや冬休みが早く終わらないかと思っていた、また、朝、家を出て、友人とそのまま喫茶店に行きおしゃべりに夢中で午後になって学校に行った、部活だけはやるために学校に行っていた等、映画『パッチギ!』(井筒和彦監督、2004年)を思わせる語りもあるが、みな、一様に楽しかった学校生活を語る。そして、インタビューの後も、学校時代を思い出して、楽しくなって一人でクスクス笑っていたと語ってくれた保護者もいる。そして、その楽しかった学校生活を

自分の子どもに経験させてやりたいという。

なぜ、こんなに学校生活が楽しいのだろうか。それには朝鮮学校を通じて形成される濃密な人間関係がある。幼少期から同じ学校で過ごし、大人になってからは、保護者として、お互いの子どもを含めてつきあいが継続する。そして、これは全国的な広がりをもつ「朝鮮学校コミュニティ」(韓, 2006)として、学校を核とした朝鮮人同士の間関係である。その中にいることを保護者たちは大事にし、子どもたちもそのコミュニティの中で育てていきたいと考えている。そして、そんな学校を支えるために献身的に活動するのだ。これは今の保護者世代が子どもの頃から行われている。

「(学校には) お金がないから、バザーなんか(やるとなれば、参加した)。子どもが4人いてたら、いろんな役員もさせられますしね。(それまでは総聯や学校との関係は) もう、全然(ない)。学校も自分の子どもが行って、初めて行きましたし。はたで(見ているだけの) 分からない時は、ぱっと(表だけ) 見たら、文句(も出る)。(中略) 子どもがやっぱり明るいですしね。で、先生はすぐく一生懸命ということだけは、誰にも負けない。だから良かったな思いますね。」(関係研・X2 1943年生、女性・2世)

また、民族教育を受けなかった保護者にとっても、子どもが朝鮮学校に通うことにより、保護者自身が民族的なアイデンティティを回復する機会になったことも語られる。

「日本の教育が、朝鮮を植民地にしててね、歴史教えたりするのが正確じゃなかったから、自分なりに、朝鮮民族はそういうふうにしっかりしてないからこういうふうになったという感じで。それは、何でかいうたら、やっぱりその、きちんとした歴史を(教えずに)、日本人の都合のいいね、教え方をされたということ。ほんで、(子どもが) 民族学校行って、自分たちがきちんとその中へ入りますわね。そこは民族のことばかりだから。私たちはけっして劣っているのじゃなくて、たまたま生活が不安定で(劣悪な生活環境に置かれたり)、そういうように教育が(歪んだ教えをしたり)、親も教育受けてなくて(その結果、自分自身を卑下して見るようになった)。なんかそういうようなことをきっちり覚えると、ちっとも劣りもしない、全くいっしょやし、優秀な人は優秀だし、何も劣ることはないんだということをはっきり分かりましたね。」

(関係研・X2 1943年生、女性・2世)

それでは、「高校無償化」からの排除の理由の一つとなった朝鮮学校の政治的な立場やそこに関わる教育についてはどのように考えているのだろうか。保護者たちの朝鮮本国に対する意見や態度は、肯定的な人から批判的な意見を述べる人まで様々である。しかしながら、朝鮮学校における朝鮮本国に関する教育をどう考えるかという点にはついては、「子どもたちが成長の過程で自らが判断すること」と考えている。

「それ(日本の報道と学校での教育のズレ)は自分で感じればいいから。家でも日本のマスコミがそういうことを悪くいったときに、そこまで悪く言われると腹が立つし、でも、面白い国だよ、変な国だよって普通に話してみたり。あの学校に入れることは、思想教育をしてるということが分かってるから、そういう道に彼らが行くんだ、それが正しいんだと感じたら、行けばいいし。自分で考えて、おかしいなあと思ったら、他に選択肢いろいろあるから、考えればいい。」(1964年生、女性・3世)

また、自分たちが朝鮮学校に通っていた頃は、今とは比較にならないほど「(北) 朝鮮一色」の教育だったし、そこで教えられることは当たり前のこととして受けとめてきたが、成長の過程で、自分たちになり疑問をもち、整理をして、消化してきたともいう。

したがって、学校にいる間は、学校を通じて教えられる朝鮮、高3の「祖国訪問」などで子どもたち自身が自分の目で見て肌で感じると朝鮮を十分に学べばいいと考えているようだ。なぜなら、学校の一步外にでれば、日本社会で流される朝鮮に関する情報も当然受け取るので、それらと学校での情報を総合的に判断する力を子どもたちは持っているからだという。そして、学校での教育や公式見解をそのまま受けとめて生きていくのも、あるいは、逆に、疑いをもって異なった道を進むのも、子ども自身が判断し選択していくことだということである。親として、重要視しているのは、子どもが朝鮮人として育つことと朝鮮人同士のつながりをもつことだと強調する。思想的、政治的な部分は「オプション」だとも言う。

「あの学校にいれるということは、思想教育もオプションでついてくるってこと。でも、朝鮮人であることを教える、それがゼロの日本学校と、どっちを選ぶ

かって言われたら、思想教育もついてくるウリハッキョを選ぶ。私もだんなも、子どもの頃から、もっとすごい思想教育を受けてきた。でも、この社会でちゃんと生きていけるから。」(1964年生、女性・3世)

板垣が同志社大学で自身のゼミ生と行った京都朝鮮第三初級学校の保護者を対象としたアンケートでも、子どもを朝鮮学校に通わせている理由として、「朝鮮民主主義人民共和国を支持しているから」という政治的立場をあげている保護者は少ないという結果がでている(板垣, 2013: 174)。この調査でも、朝鮮語習得、朝鮮人としての誇り、朝鮮人同士のつながりなど、日本の学校では得ることができないものが上位にあがったという(板垣, 2013: 174)。

もちろん、保護者たちには学校に対する多くの不満や批判はある。それは、日本の学校の保護者たちと変わらない。しかし、保護者たちは自分たちの経験から、自らの存在を否定されることなく、安心していられる朝鮮学校の大切さを認識している。だからこそ、単に受け身で子どもを学校に送るのではないのだ。保護者たちの有形無形の支援が学校を厳しいながらも存続可能にしているのである。

生徒たち

それでは、現役の生徒たちにとって、朝鮮学校はどのような存在なのだろうか。もちろん、学校に対する気持ちは個人それぞれだが、保護者たちが「楽しかった」と語る学校生活が想像できる雰囲気は学校には残っている。

その背景には、やはり、朝鮮学校が一つのコミュニティとして機能していることをあげることができる。「在日朝鮮人」として、同じ歴史的な背景を共有する仲間たち、教職員、そして保護者たちに囲まれ、朝鮮人であることを理由に自身を否定されないで育つ、そして、その多くは幼少期からの顔なじみであるという事実。現職の教員も、朝鮮学校出身者であり、今の保護者が教員の教え子であるということもよくある話である。

コミュニティ内部で共有している歴史や物語、個人々の生活史があり、生徒たちもその中で安心して過ごすことができるという感覚をもっているようである。このコミュニティの存在は、具体的には学校行事などで体験される。前にも述べたように、運動会や文化祭では、多くの同胞が集まり、自分の子どもであろうが、他人の子どもであろうが、関係なく声援を送る。また、運動会の昼食時間は、地域ごとに区切られたテントの中で、生徒た

ちは同じ地域に住む同胞たちと盛大な手作りのお弁当を食べる。このように、生徒たちも幼少期から、在日朝鮮人同士の濃密な人間関係の中で育ち、その良さを実感し、「好き」で「離れたくない」と語るようになるのである。

「在日朝鮮人の社会がめっちゃ好きなんですよ、僕たち。(私: なにがそんなにいいの?) 人付き合いじゃないですかね。楽しく、普通に楽しいことばっかあるし。本当に……単純に面白いんで。だから、在日朝鮮人の社会がめっちゃ好きなんです。だから、死ぬまで一生、朝鮮の名前で生きていくと思います。」(1993年生、男性・4世)

インタビュー当時まだ19歳の青年が「めっちゃ好きだから離れたくない」と語る「在日朝鮮人の社会」は、そのまま、朝鮮学校を核とした在日朝鮮人たちのコミュニティなのだ。当事者たちは「温室」だとも言うが、確かに、そこは、日本社会の不安要因から自分たちを守ってくれる場所なのだ。「高校無償化」排除をめぐる裁判でも、愛知中高の卒業生は次のように意見陳述をし、朝鮮学校の意味を述べている。

「ウリハッキョ(朝鮮学校)に通う子たちは同じ民族なんだ。当時、私はそう思うだけで幼いながら安心感を覚えました。今思えば、私が感じたこの安心感は、間違いなく日本国内に漂う在日差別や排外主義から自分を守ってくれる場所を見つけたところからきていると思います。」(『とり通信』7号)

前項でみた日本の学校から朝鮮学校に編入した保護者たちが感じた「安心感」を、約40年が経過した現在でも生徒たちが感じなければならないという日本社会の現実を読み取ることができるであろう。

しかし、生徒たちの日常は、おそらく今の日本の学校に通う10代の若者たちのそれと大差はない。学校内の先輩-後輩関係における愛知中高内で代々引き継がれてきた、一見「意味がない」ように見えるルール(電車の車両が学年ごとに決められている、最寄りの駅から学校までの道も学年ごとに決められている、授業後部室まで、高2以下はダッシュで向かわねばならない等)を忠実に守りながら、朝の登校をし、一日の授業をこなし、そして小組(ソジョ)と呼ばれる部活動に熱中する。「帰宅部」の生徒もいて、かれらは学校から許可をもらってアルバイトに専念したり、学校外での趣味に夢中

になったりしている。

授業も民族科目（朝鮮語、朝鮮地理、朝鮮歴史、現代朝鮮歴史）以外は、日本のカリキュラムと大差はない（もちろん、それらの授業は全部朝鮮語で行われているし、音楽では朝鮮の歌や曲を学ぶことができる。課外活動では朝鮮の民族楽器や舞踊を学ぶこともできる）。授業中の雰囲気も、教員と生徒の距離が近いせいか、相互作用は活発だが、その内容に退屈していたり、居眠りをしていたり、「内職」をしている生徒がいるのは、どこにでもある学校の風景である。

しかし、日本の学校の生徒がおそらく考えたこともないことを、朝鮮学校の生徒たちは意識している。ある種の「使命感」をもっているようにも見える。それは、先にも述べた「ウリハッキョを守る」ということだ。「守る」という言葉の裏にあるのは「学校がなくなるかもしれない」という危機意識だ。学校が直面している財政難とともに、過去から現在に至るまで経験している日本社会からの政治的困難（当事者たちにとっては「弾圧」）を生徒たちは認識しており、学校が閉鎖におこまれるかもしれない、だから守らないといけないという意識をもっているのである。

ただし、実際にどう学校を「守る」のかという問いかけに対しては、生徒たちの悩みは多い。おそらく、朝鮮学校をとりまく問題は難問が多すぎて、どうすればいいのかわからないというのが本音であろう。「ぼくらの子どもが通う朝鮮学校はあるんでしょうかね？」という生徒たちのぐちのような一言が、かれらの学校に対する思いともどかしさをあらわしているように思われる。

ここまで、私自身の愛知中高での参与観察、インタビュー調査からの知見を中心に、朝鮮学校関係者にとって、朝鮮学校がどのような意味をもつのかを描いてみた。本節にはじめに紹介した歌に歌われるように「ウリハッキョは私たちの故郷だ」と当事者たちが考えるのは、朝鮮学校がそこに関わる朝鮮人たちにとっては、自分のルーツを否定することも、また否定されることもなく、そして、自分のルーツに関することを学ぶこと、そして、家庭や学校を通じて継承し、さらに獲得した民族性を何も躊躇することなく表出することができる場所であるからだ。

朝鮮学校が常に外からの攻撃にあう危険性⁸⁾はあるが、その内部においては、「安全な家」としての機能をしている。朝鮮人たちが自らの手で設立し、運営してきた朝鮮学校という空間は、その意味において、朝鮮学校に関わる全ての人にとって、日本社会で堂々と朝鮮人として生きていくために自分たちを育て、守ってくれる場

所なのである。その意味において、朝鮮学校は「故郷」としての役割をもっていると言えよう。

アイデンティティ

さて、このような環境で教育をうける朝鮮学校の生徒たちのアイデンティティはどのようなものであろうか。そのことを考察するにあたって、日本の学校で教育を受けた人たちが語る在日朝鮮人としてのアイデンティティの葛藤をみてみることにしたい。

私が教鞭をとる愛知県立大学にも在日朝鮮人学生が在籍している。そのほとんどが日本の学校での教育を一貫してうけてきたが、初級部まで朝鮮学校での教育を受けたという学生にもこれまで数名出会ってきた。かれらの学内での民族性の「表出」の仕方は様々である。たとえば、名前についても、多くが通名である。また、本名であっても日本語読みで過ごすなど、朝鮮学校の生徒たちのように「ごく当たり前」に本名の朝鮮語読みで生活する学生はこれまで一人しか出会ったことがない。

一見、なんの葛藤もないように生活しているかれらも、授業中のレポートや研究室を訪ねてきて話していく内容には葛藤が現れる。

「私も在日韓国人4世です。国文学科にいと『日本大好き』な人が多くて居心地の悪い思いをしています。先生たちも『日本人ならば当然知っていますよね』って感じで話をするので、私は『日本人じゃないのになあ』って言いたくなります。日本人しかいないっていう前提しかないのですね。」(2013年度 一般教育「社会学」)

「私は在日韓国人3世です。色々と複雑で、弟たちの父親は日本人なので、きょうだいで私だけが韓国籍です。隠しているわけではないのですが、母も私も弟たちにはこのことを話していません。祖母の家では法事もあるので、銀の食器で食事を用意して、それを見て、弟たちは『おばあちゃんち、韓流っぽい』って言ってますが。友だちには、勇気をもって話したことがあるのですが、『ふーん』っていう感じ。『気にすることないじゃん』と言います。何もわかってもらえないと感じました。」(2014年度 一般教育「社会学」)

「(初級3年生まで) 朝鮮学校に通っていたことはあまり言っていません。説明するのが面倒で。僕らの存在自体、何かもわかっていないのに、朝鮮学校を説明してもわかるはずがない。長い説明を聞いてもらえると

も思えないし。名前も漢字で見ると本名ですが、読み方は日本的にしています。姓も日本語読み、下の名前も読み方は日本語的な読み方。だから、変わった姓だになっていう程度にしか周りにはわかっていないと思います。言ってもわかってもらえないし。面倒なだけ。」
(2015年2月 愛知県立大学 研究室にて)

このように、在日朝鮮人である自己を日本社会の中では「ありのまま」に受けとめられない、そのことを周囲に話しても、そもそも「在日朝鮮人がなぜ存在するのか？」もよくわかってないし、それだから、自分が朝鮮人であることを話しても、そのことの意味すら、理解されない。自分の存在について、長い説明をすると「ひかれる」のではないかと思ひ、ならば、何も言わずに過ごしていくほうが「無難」であるが、しかし、心のどこかでひっかかるものを感じるという。

日本の公教育においても、1970年代から大阪を中心とした在日朝鮮人の子どもが多く在籍する学校では、「民族学級」が積極的に展開されてきた。そこでは、朝鮮人であることに対する否定的なイメージを肯定的なものに転換させる活動が継続的に行われ、一定の成果があることは、これまでの研究が明らかにしてきた。しかし、民族学級を経験した当事者にとっては、そこでの経験は、複雑な思いがからまった思い出となるようだ。冒頭で述べた、私たちの共同研究「在日韓国朝鮮人の家族親族単位の世代間生活史調査」の二次調査で出会ったX20(1972年生、女性・3世)は一貫して日本学校での教育を受けた。そして、自身が小4～中学まで受けた「民族学級」での経験を次のように振り返った。

「小学校内でね、月1回とかあったんですよ。在日同士を集めて、いろいろ在日の、まあ、歌とか踊りとか、映画鑑賞とか、そういうのがありました。うん、講師っていうか、先生が来られてっていう。まだね、その差別っていうのが分からない時には、楽しく行ってたんですよ。ただ、4年の時の担任の先生から、まあ思えば、クラスで私一人だったんですよ、男の子と私と呼ばれて、今思えば、その先生の好意だと思うんですけど『とりあえず韓国人なんだから、なんか強く生きてね』みたいな(ことを言われた)。強く生きていかなければならない。そこで、あっ、私は差別される人間なんやっていうのを感じ取り、いやになりましたね。あっ、私たちも差別される人間なんやっていう、まあ、アウェーな人間なんだというのは、すごく感じ取ってますね、避けるように。あまりその話され

たくない。なんか、民族学級に参加すること自体が秘めごとみたいだったんです。〇〇君と△△さんは放課後残ってみたいな感じで。そうすると、周囲はなんで?ってなるんで……。なかなかいいイメージにはならないですよ。」

このように語るX20であるが、それでも、民族学級での経験を通じて、高校では「本名宣言」(とは言っても、民族姓と日本名の混合。しかし、明確に在日朝鮮人であることを周囲に伝える)する等、彼女なりに「民族」と向き合おうとしてきたことが語られた。

X20の夫(X14、既出)は中学まで朝鮮学校に通い、高校、大学と日本の学校を出た。大学の途中まで本名の日本語読みで生活していたが、大学時代に再度、自らの民族と向き合い、名前の読み方を朝鮮語読みにしたという。それだけに、名前に対するこだわりは強く、X20に対しても積極的に本名(朝鮮語読み)で呼びかけているという。それでもX20自身は、自分をどう名乗るかということについて、葛藤しているようだ。

「(日本名である)『木村』(仮名)っていうことでね、やっぱり隠してる部分があったんですよ。やっぱり、私は本当にX14と結婚して、いろいろ名前について二人で語り合うことがあって、やっぱり、『木村智子』でいくのって、私自身は隠してる自分。で、『李英順』で名乗るほど、私は韓国ではないです。まだ、やっぱり言葉も知らないし、X14みたいに堂々と生きていけない。なので、私は中間の『李智子』でいてたんですよ。今も、やっぱり『木村智子』として、堂々と私は韓国ですと言えるのが、本当の自分(自分の内実をよく表している)だと思います。」

そして、自分の娘(インタビュー当時1歳)には、もっとストレートに民族を受けとめてほしいと願っているようだ。

「私がX14に惹かれた部分は、あの、会った時にね、朴哲秀(仮名)ですと、もう本当に、すさまじく、もう、さすががしく、朴哲秀ですと言ったときに、私、こんなにまっすぐに、自分の名前を名乗れるのがすばらしいな、本当に尊敬したんですよ。それを聞いた時に、彼の生きてきたなかで、やっぱり朝鮮学校に行っていて、民族教育を受けてるという部分は、やっぱり大きいですよ。あの、ちょうど思春期を跨いだ時期にね、まっすぐに自分の民族を捉えているっていうか、

まあ、彼なりにいろいろこう、あったにもかかわらず、こうやってまっすぐに受けとめれるっていうのは、やっぱり民族教育で仲間意識とか、民族の大切さとかをリンクしたからこそなのかなと。私の結論から言うと、その名前をまっすぐに受止めてほしい、自分（娘）が、えっと、前向きに名前を受けとめれるようになるまでは、民族教育を受けさせたいなと思ってます。」

朝鮮学校の参与観察からわかることは、朝鮮学校に通う生徒たちには、このようなアイデンティティの葛藤をほとんど経験しないですむということである。「朝鮮人であること」は自明のことであり、誰にも否定されない場所として朝鮮学校が存在しているからだ。少なくとも学校内やそのコミュニティの中では「朝鮮人として生きること」は保障されている。そして、前節までに述べてきたように、朝鮮人としてのアイデンティティの「核」を作るような教育も受けているからであろう。

もちろん、朝鮮学校の生徒たちの中にも、例えば、アルバイトや塾などでは日本名を使用する生徒たちも存在する。また、保護者たちが仕事の都合で日本名を使用している場合、さらに学校外の日常生活では日本名を使用しているという生徒もいる。しかし、そのことに対する葛藤はほとんど見られない。先に引用したX20の語りに見られるような「自分をどう名乗るか」という苦悩は朝鮮学校の生徒たちには見られないのである。かれらのこうした行為の背後には日本社会の差別の問題があることは考慮しなければならない。しかし、かれらの日本名使用に対する「屈託のなさ」は、逆に言えば、朝鮮学校という朝鮮人であることを肯定され、保障されている場があるからこそであろう。

朝大を中退後、色々な仕事をしながら生計をたててきたある3世の男性は次のように言った。彼も生活の多くの部分を日本名で営んでいる。しかし、自分が朝鮮人であることには揺らぎがないと語る。

「僕は朝鮮人社会から離れているんですよ。で、その間、僕はずっと一人で朝鮮人やってきたんですよ。それができたのは、やっぱり朝鮮学校のおかげなんですよ。」(1968年生、男性・3世)

私自身の朝鮮学校研究の問いのスタートは「なぜこの子たちはこんなに明るいのだろう」というものであった。これまでの知見から、かれらの「明るさ」を支えるのは、朝鮮学校の中で朝鮮人としての民族性を自然に継

承し、さらに獲得しているからだと考えている。先にも述べたが、自分のルーツを隠すことなく生活できる場において、屈折なく朝鮮人としてのアイデンティティを形成できるのである。そして、その朝鮮学校に関わる人（それは外部者である私自身も含まれるだろう）への「信頼」が、私自身をひきつけた生徒たちの「人なつこさ」にもつながるのではないかと考えている。

II 朝鮮民主主義人民共和国と朝鮮高校

本節では朝鮮学校の生徒にとって、朝鮮民主主義人民共和国（朝鮮）の意味を、当事者たちの経験をベースにしつつ、描き出すことを目標としている。

現在の日本社会においては、朝鮮学校と朝鮮の関係は、否定的にしか捉えられない。朝鮮学校を擁護しようとする人々の言説をみても、近年、その関係が弱まっていることを強調する。たとえば、社会学者の小熊英二は東京朝鮮第四初中級学校訪問記を2013年10月15日の『信濃毎日新聞』に寄稿し、次のように述べる。

「朝鮮学校といえば北朝鮮崇拝教育、というイメージがあるが、それは実態に即していない。北朝鮮首脳などの肖像画は、2000年代に校内からなくなった。北朝鮮の小中学校にある「社会主義道徳」や金日成伝などの科目もない。朝鮮語や朝鮮史の科目数は多いが、それを除けば、教科は日本の学校と大差はない。」そして、保護者で朝鮮学校選択理由に「北朝鮮政府への支持を動機にあげる人はほとんどいない」と言う。

また、近年、朝鮮学校に関する研究、それも、参与観察等、フィールドワークをベースにした研究成果が発表されるようになってきている。しかし、朝鮮と朝鮮学校の関係については、その歴史（1957年からの「教育援助費・奨学金」など）については言及されるが、では、今、現在、どうなのか？という点については、（意図的か否かは別にして）議論は避けられる。この点は「脱色」され、「多文化共生」や「地域に開放/根ざした」学校という視点で語られることが多いように思われる。

確かに、現在の日本社会において、朝鮮学校が朝鮮と関係をもっていることを積極的に語るには、多くの「言い訳」が必要である。戦後の日本が曲がりなりにも形成してきた「民主主義的価値観」とは、異なる政治・社会体制をもつ国家として朝鮮が見なされているからであろう。日本で広く共有されている社会科学的な視点では、あの朝鮮は批判すべきものという「前提」が存在し、その「前提」を疑うような素地もない。

また、朝鮮学校の政治的立場＝朝鮮民主主義人民共和国を朝鮮半島における正当な国家としてみなす——と対

立する立場、すなわち、南の大韓民国（韓国）を正当な国家としてみなしている日本において、私たち研究者が、朝鮮学校や朝鮮をどう語ろうと、そこに一種の政治性がついて回るといふ困難が存在する。研究者の立場性の説明に多くの紙面をさいて、はじめて、朝鮮学校を論じることができるのである。

私自身、この「困難」にいかに対処すればよいのか、その答えは見つかっていない。しかしながら、朝鮮学校と朝鮮の関係を、避けることなく、正面から論じない限り、朝鮮学校の「実像」は浮き彫りにできないと考えるようになっている。

本節では、朝鮮学校でのフィールドワークの成果および、愛知朝高の朝鮮への〈祖国訪問〉（修学旅行）同行調査（2013年6月11日～6月22日、2014年5月29日～6月12日および2015年6月2日～6月13日の成果を踏まえて、朝鮮学校や朝鮮学校生にとっての〈祖国〉（朝鮮）の意味について考えてみたい。

〈祖国訪問〉同行調査まで

まずは、いかにして、日本人である私が愛知朝高の〈祖国訪問〉に同行するようになったのか、その経緯と方法について説明しておく。

「朝鮮学校と北朝鮮の関係は以前のように強くない。」
「以前は朝鮮の「海外公民」としての教育をしていたが今では、日本に暮らしていくこと、つまりは在日朝鮮人であることを前提として教育にシフトしつつある。」

私自身、これらの言説に後押しされるようにして、朝鮮学校でのフィールドワークを始めた一人であることは認めなくてはならない。つまり、このような言説が、朝鮮学校研究を開始するにあたっての「タブー感」のようなものを、緩和してくれたのである。

しかしながら、朝鮮学校に出入りしていると、上述のような言説には違和感を感じるようになった。朝鮮学校の立場は、厳然と朝鮮の正当性を主張し、また、日常的な学校生活でも、特に高校では、朝鮮との結びつきを示すものが多い。それは、各教室に飾られている金日成、金正日の肖像画にはじまり、生徒たちが朝鮮の祝日にあわせて作成する「壁新聞」にも、ごく「自然に」、朝鮮の指導者のことが書かれ、（ひょっとしたら生徒たちにとっては、「当たり前」に使用している言葉だけに、大した意味をもたないかもしれないが）朝鮮との心理的距離の近さを表現する内容となっていることから読み取ることができる。

さらに、学校の公式行事における挨拶でも、必ず朝鮮のことが言及され、また、朝鮮学校も金日成、金正日、

金正恩たちの指導に導かれて存在する等の文言が現れる。

フィールドワークを開始して間もない頃の私は、これらの「事実」に戸惑いを感じた。日本社会で形成された朝鮮のイメージから自由になれなかった私は、これらを目の当たりにして、「ここにいてもいいのだろうか」という居心地の悪さを感じ続けた。もちろん、理屈の上では「朝鮮と朝鮮学校の関係は、朝鮮学校の当然の権利である」と認識していたが、その理屈ではおさまきれない違和感、さらに言えば拒否感を感じたことは事実である。

しかし、同時に、これらの事実を前にして、簡単に朝鮮学校と朝鮮の関係を「無」にして、朝鮮学校を論じることができないと考えるようになった。朝鮮学校関係者にとって、「祖国（＝朝鮮）」の意味を考えなければ、朝鮮学校を描くことはできないと考えるようになったのである。

さらには、公的な場面以外でも、朝鮮学校の生徒たちが朝鮮に対して「憧れ」や「愛着」を持っていることにも気づかされた。「ウリナラ（＝朝鮮をさしている）に行けていいなあ」「ウリナラに行ってみよう」「ウリナラにまた行きたい」などという声を頻りに耳にするのである。

朝高では、後に詳述するが、12年間の民族教育の集大成として〈祖国訪問〉が高3生全員対象で用意されている。だが、それまでに、例えば、「ソルマジ（迎春）公演」⁹⁾や「学生代表団」として、高3までに複数回、朝鮮を経験している生徒たちがいる。そうした同級生や先輩たちの経験談を聞いて、生徒たちは、シンプルに「行ってみたい」と考えるようだが、私には、当初、そのことを理解するのは、やはり困難であった。

日本社会で、朝鮮は絶対的に「他者化」されており、朝鮮に関するイメージが実に貧困だった私にとって、日常的なレベルで、生徒たちが朝鮮と心理的に非常に近く、朝鮮との一体感をもっていることに対する理解が非常に困難であったのだ。

さらに、〈祖国訪問〉を終えて、朝鮮から戻ってきたばかりの生徒たちの変化にもある種の「戸惑い」を覚えた。生徒たちは一様に「楽しかった」「また行きたい」と口にし、私に朝鮮の良さを伝えようとした。しかしながら、私にはどうしても理解できなかったことも事実である。どれだけ言葉を尽くして生徒たちが私に語っても、私自身、日本社会に流れる否定的な朝鮮像から自由になれなかったのだ。

「行かなければわかりませんよ。」

当時、朝大1年生だった男子学生にこう言われたことが、「朝鮮へ行ってみよう」と思うきっかけになった。彼は私に「ウリナラ行った体験のことを聞かれて、いつも言うんですけど、伝わんないと思うんですけど。違うんです。着いた瞬間、わかるんです。空気が違う。ここが祖国だってわかる、感じる。あっちの人たちの対応だったり、空気っていうか。ホント、特別。あれは行かないきゃわかんない」と語った。

「なぜ、彼は生まれ育ったところでもない朝鮮を『祖国』だと言うのだろうか？ それは、単に学校教育の成果なのか？ 私自身、平壤に行くことによって、かれらとのこの距離をうめることができるのだろうか？」

こんな問いが、彼にインタビューしながら頭の中に浮かんできたのである。そして、「朝鮮に行ってみよう。できるならば、朝高生と一緒に平壤に行き、同じ時間を過ごしてみたい」と思ったのである。

早速、当時の校長や対外担当の教員にその希望を伝えた。しかしながら、答えは「難しい」だった。それは、朝鮮の海外同胞や外国人の受け入れの仕方に起因する。まず、外国人であれ、海外同胞であれ、朝鮮ではいわゆる「自由旅行」はできない。訪問目的にそって、受け入れ機関が決まる。日本人である私と海外同胞である朝鮮学校生とは、訪問目的も異なるし、当然、受け入れ機関も異なるからだという。したがって、朝鮮学校の受け入れ機関（海外同胞局＝海同局）が、日本人である私を受け入れることはできないという。だから、朝鮮学校生と一緒に訪朝するのは簡単なことではないと説明された。

しかしながら、私はあきらめがつかず、何度も朝高や総聯愛知県本部に希望を伝えた。そうして得たアドバイスは「機会を見つけて訪朝すること。受け入れ機関である朝鮮対外文化連絡協会（対文協）と信頼関係を作って、朝高生に同行したいという希望を理解してもらいなさい」というものであった。

当時は「どうしたらそれが可能になるのか？」と途方に暮れたが、いざ実行しようと思うと、訪朝の機会は意外に簡単に訪れた。2011年10月18日～22日の初訪朝を皮切りに、2012年6月16日～21日（一部、愛知朝高の訪問団に同行）、2012年8月25日～30日（「日朝友好学生・教員の訪朝団」）と3回の訪問を経て、対文協に私の目的を理解してもらった。3回目の訪問時、担当の案内員に、毎晩、私の研究計画を話し、どうしても愛知朝高に同行する必要があることを話し続けたら、ようやく「わかりました。やってみましょう」と返事をもらい、2013年6月の同行訪問につながったのである。

もちろん、対文協の理解と多大な苦勞、海同局の協力

がなければできないことであったが、何よりも、私の目的を理解を示し、総聯中央や朝鮮の関連機関に正式に私の訪問を提起してくれた愛知朝高、総聯愛知県本部の協力なしには、この調査の実現は考えられない。

訪問の形式はあくまでも朝高とは別の訪朝団としての受け入れであった。事前に対文協が海同局と連絡を取り合い、プログラムをすりあわせ、日程を組んでくれた。したがって、私には2人の案内員と乗用車が一台用意された。

しかし、訪朝回数を重ねるにつれて、海同局の指導員たちとも顔見知りの関係となり、時として、朝高生たちが乗っているバス¹⁰⁾にも同乗させてもらった。それによって、バスの中での朝高生たちの姿も見ることができた。生徒たちは疲れ果てて寝ていることもあったが、多くの時間は、朝鮮の歌を覚え、その歌を部活別、出身地域別など、様々な単位で競い合う時間となっていた。海同局の指導員が、歌の指導をする機会も多い。ところで、昨年（2014年）までは、歌を覚える時、学生たちはその歌詞を「パダスギ」（ディクテーション）で書き取っていたが、今年（2015年）は、自分たちのスマートフォンで歌詞の写真をとり、それをみながら歌っている姿が印象的であった。それを「許す」指導員たちがいたわけで、朝鮮の人たちの生活にもスマートフォンが根付いていることを示していると感じた。

なお、宿所は、2013年は、朝高生と同じ平壤ホテルが取れず、徒歩で20分ほどの距離の高麗ホテルを宿所とした。2014年、2015年は朝高生と同じ平壤ホテルに宿泊できたので、生徒たちとの自然な交流や特定のプログラムがない時間の生徒たちの様子も観察ができた。

訪問中のスケジュールは表2の通りである。本稿では全日程同行した2014年のものを参考にあげておく。下線は朝高生との同行ができず独自のプログラムを組まれたものや、夕方は受け入れの対文協の知人たちに会う時間に費やしたため、結果として、別行動が増えた。なお、2013年、2015年は朝高生よりも5日ほど遅れて平壤入りし、2日遅れて平壤を出た。

〈祖国訪問〉概要

先にも述べたように、〈祖国訪問〉は全国に10校ある朝鮮高校3年生の生徒全員を対象にしている。毎年、6月から7月（一部は9月）に実施され、現地で2週間を過ごし、平壤市内を中心とした多くの参観地をめぐり、そして、現地の人々との交流プログラムをこなす。訪問先は学校によって多少の差はあるが、基本的には同じところを訪問するようである。

愛知における朝鮮学校

表2 日程 (2014.5.29~6.12)

日・曜日	午前	午後	夕方
5/29 木		19:15 平壤到着	日程打ち合わせ
30 金	万寿台銅像 革命烈士陵 平壤民俗公園	主体思想塔 凱旋門	対文協と食事
31 土	万景台故郷の家 (金日成生家)	メアリ射撃場	朝高校長と夕食
6/1 日	白頭山	ベゲボンホテル	
2 月	白頭山光宮故郷の家 鯉明水の滝	三池淵大記念碑	対文協と食事
3 火	金日成総合大電子図書館 プール 平壤ボーリング場	ルンライルカ館 光復地域商業中心 平壤サーカス	歓迎宴 (対文協主催)
4 水	妙香山・国際親善博物館	焼肉交流会	
5 木	国家贈物館	玉流館冷麺昼食 祖国解放戦争勝利記念館 ハナ音楽情報センター	総聯駅前食堂
6 金	美林乗馬クラブ	ムンスプール 市内散策	
7 土	信川博物館	3.8沙里院ホテルで食事 開城世界遺産	子男山旅館泊
8 日	板門店	民俗旅館で食事	対文協と食事
9 月	平壤国際サッカー学校 玉流児童病院	地下鉄 市内散策	
10 火	愛知朝高運動会	キョンサン幼稚園 (九州朝高と)・ 平壤学生少年宮殿	
11 水	チャンドク学校 (姉妹校) 訪問	チャンドク学校 総括	平壤ホテル主催 送別会
12 木	帰国		

この高3での〈祖国訪問〉の開始時期は1980年代前半からである。当初は、無遅刻無欠席、学力向上への努力、学内外の活動への積極参加などが評価された「模範班」(班は学級を意味する)のみが行っていたようである。開始は1982年で1988年まで、「模範班」が行くという形式が続いていたという。

朝鮮学校内では「〈祖国〉へ行こう」という気運が各学級で盛り上がったという。当時、朝高で教員をしていた人の回想によると「朝鮮高校が変わっていく一つの契機ともなった。公式試合への出場権利獲得と〈祖国〉へ行くために『模範班』になろうという気運の二つが、朝鮮学校がある意味でおとなしくなっていく契機になった。外でケンカをしたり、トラブルを起こさなくなっていくきっかけになった」(50代・男性・朝鮮学校教員)という。

今のように、高3全員が対象となったのは1989年であり、それが現在まで続いている。日朝関係の悪化などで、例えば、それまで使用していた船の往来がなくな

り¹¹⁾、時期がずれたり、希望者だけになったりしたことはあるが、これまで一度も中断することなく実施されているという。ただし、経済的な理由(現在では約20万円かかる)や日本の大学の受験準備等の理由で、不参加の生徒も、愛知朝高では毎年数名いる。

〈祖国訪問〉を実施するようになった背景には、在日朝鮮人の日本永住が自明視されるようになったことがあるという。1980年代〈祖国〉を実際に知ることが必要だと認識され、教科書だけで学んできた〈祖国〉を「体験」することの重要性が議論される中で実現したという。朝鮮大学校のある教員は「在日朝鮮人社会のみで生きるという『籠の中の鳥』を脱し、日本永住が前提となったとしても、決して、〈祖国〉との結びつきが切れるのではなく、強めていくことが必要だと考えられた」(2014年9月インタビュー)と話していた。

ちなみに、朝鮮大学校は卒業学年の学生たちが1980年度から〈祖国訪問〉をしてきた。現在では、4年生学部は3年生、3年生学部および短期大学部の学生は2年

生が、毎年40日から50日程度の日程で、現地での実習を兼ねて、訪問している。

もちろん、これが可能になった背景には、1965年に朝鮮籍の在日朝鮮人が「祖国往来の権利」を獲得したこと、その後、朝鮮側の受け入れ体制が整備され、規模の大きい訪問団を受け入れることができるようになったことなど、外的要因も影響している。

訪問日程

表2に見られる通り、訪問中のプログラムは多岐にわたっている。2週間の訪問中、朝高生はクラス別にバスに乗り、クラスに一人から二人つく海同局の指導員、そして、責任指導員、医師、看護師、さらに訪問記録をビデオに撮るカメラマンと監督とともに行動をすることになる。かれらは全員同じホテルに宿泊し、全行程をともにするので、文字通り2週間、毎日24時間ともに過ごすことになる。生徒たちにとっては、最も身近な現地の人となる。

日中のプログラム終了後、夜は、その日の反省会（総括）が行われ、それぞれが何を感じ、考えたかを話し合う。時として、担任教師以外に、指導員が同席し、生徒たちの理解を助けることもしているようだ。

訪問中のプログラムを、私なりに分類してみると、次の10種類に分けることができるであろう。参観としては(1)抗日運動と革命の歴史に関する場所（革命烈士陵园、凱旋門、白頭山、金日成生家など）(2)朝鮮の社会主義国家建設の象徴として紹介される場所（主体思想塔、地下鉄乗車、金日成総合大学、幼稚園・託児所訪問、工場見学など）(3)朝鮮戦争、南北分断の現実を感じる場所（板門店、信川博物館、祖国解放戦争（＝朝鮮戦争）勝利記念館、祖国解放戦争事績地など）(4)名所旧跡（開城世界遺産、香山歴史博物館など）(5)現在の平壤＝人民の文化的生活向上のための施設訪問（最新の娯楽施設＝イルカ館・プール・乗馬場・遊園地等、平壤国際サッカー学校、平壤市内の建設ラッシュ説明など）(6)世界の中の朝鮮を学ぶ施設（国際親善博物館、国家贈物館など）をめぐる。

さらに交流プログラムとして(7)現地の青年たちとの交流プログラム（姉妹校生徒との交流ボーリング、姉妹校訪問交流会、その他、同世代の青年たちとの交流プログラム）(8)現地の人たちとの交流（指導員、ホテル従業員、食堂従業員など）(9)親族との面会（事前申請者のみ）がある。そして、(10)朝高の生徒同士の交流、話し合い（運動大会、毎晩の反省会、その他、歌などの練習など）も行われる。

このように、2週間、かなりタイトなスケジュールをこなし、生徒たちは朝鮮を体験し、学び、そして、直接、目で見て、感じることを通して、自分たちなりの「朝鮮像」を形成していくのである。

訪問中の「指導」——現地指導員たちのメッセージ

ところで、訪問中、生徒たちが受ける「指導」は、要約すると次のようなものになるであろう。すなわち、日本の植民支配への闘いの歴史、その後の南北分断の中で、北側の朝鮮民主主義人民共和国は常に「巨大な帝国であるアメリカ」に対峙しながら、独立を守ってきた、そして、現在は社会主義国家建設、強盛国家建設にむけて邁進している、人民の生活は向上しつつある、それらは常に金日成主席、金正日総書記および金正恩第一書記の指導に導かれて可能になったというものである。また、参観地での解説では、日本の植民支配への抵抗の歴史、革命の歴史、そして社会主義国家建設にむけての闘争の歴史、さらに朝鮮半島分断による悲しみと統一への願いが繰り返される。そして、生徒たちには「みなさんは日本に住んでいるが、朝鮮の海外公民として、堂々たる朝鮮人として、〈祖国〉の社会主義国家建設と祖国統一に寄与して欲しい」というメッセージが送られる。

このように書くと、朝高の〈祖国訪問〉があたかも「プロパガンダ」旅行のように思われるかもしれない。確かに、指導する側の意図として、日本という政治社会体制が大きく異なる異国で生まれ育った在日朝鮮人学生に対して、朝鮮民主主義人民共和国を、朝鮮の政治的立場にそって理解させたいという意図があることは事実であろう。

さらには、朝鮮の指導者に対する過度な崇拜を強要しているようにも見えるかもしれない。しかしながら、金日成が日本の植民地支配時代、満州地域で抗日戦争に参加した朝鮮人指導者の一人であり、朝鮮民族、朝鮮の独立のために、命をかけて闘った朝鮮人にとっては「英雄」の一人であることは事実である。金日成を理解することが、1945年以降の朝鮮社会を理解する上で、分断後の北側の国家成立の過程を理解する上で、「異常」なことではないだろう。

また、金正日の時代に朝鮮が経験した「苦難の行軍」（社会主義国家が崩壊していき、協調していた国家がなくなったことで、朝鮮は経済的困窮と饑餓を経験した）、そこからの回復に対する朝鮮民衆の「感謝」、そして、現在の金正恩の時代に、他の国と同様に、内部に様々な歪みはあるものの、平壤を中心として、経済的発展をし

つつあることは事実である。その成果を、全て指導者たちの「偉業」として位置づけることに違和感はあるが、現地朝鮮で、朝鮮の立場から、〈祖国〉朝鮮がどのような国/社会であるかを説明されることが、ことさら「おかしな」ことには思えない。

もちろん、誇張もあるし、「偉大なる」「敬愛する」などという形容詞は指導者の名前の前には必ずつけられるが、そのような体制の中で、朝鮮が国家建設を行ってきて、そして、今も政治/社会体制を形成しているのだと理解すれば、その枠組みの中で、〈祖国訪問〉中の朝高生に対する教育、指導が行われることも、理解可能なことになるであろう。

もちろん、私自身も初訪朝の時には、各参観地での解説が「政治宣伝」にも聞こえて、ずいぶん戸惑いを感じたものだ。しかしながら、朝鮮の1945年以降の国家形成過程や現在の朝鮮の立場を学ぶにつれて、朝鮮の主張もそれなりに理のあるものであることは理解できるようになった。生徒たちは、学校での教育を通じて、基本的な知識はもっているようで、現地での指導をそれなりに消化しているようだ。

生徒たちが見る朝鮮

1 「祖国の愛」

それでは、生徒たちはこれらの指導をどのようにして受けとめているのだろうか。全体的には、朝鮮での指導を生徒たちは生徒たちなりに受けとめ、さらに、現地の人たちとの交流を楽しみ、2週間の訪問を満喫するようだ。

2週間の訪問が終わり、空港へ向かってホテルを出発する朝、生徒たちと現地の人たちは別れを惜しみ続ける。バスから身を乗り出して手をふる生徒たち、それに応えるホテルの従業員、また、平壤近郊に住む親族の人たちも見送りに来て、かれらの目からも涙があふれている。空港へ向かうバスの中では、2週間、24時間行動をともにした指導員たちの最後のメッセージを聞き、現地で習った歌と一緒に歌いながら、号泣する生徒たち（及び教員）がいる。空港でも、生徒たちと指導員たちを隔てる税関を通過した後も、いつまでも、いつまでも手を振っている生徒たちの姿。同行調査のたびに、このシーンを目にして、生徒たちが朝鮮でここまで「感動」するのはなぜだろうかと考える。単なる感傷ではないことは、行動をともにすると実感としてわかるのであるが、そのことの意味を掘り下げる必要があると考えている。かれらの「感動」はなんだろうか？

本節の冒頭でも述べたように、生徒たちは朝鮮に対し

て親愛の情を持っている。その情は、初級部から色々な形で繰り返される教育（南北朝鮮ともに「祖国」だというスタンスはありつつも、国家としての正当性は北側にあるという立場なので、当然、北側に関する肯定的な情報は多くなる）、実際に訪朝した身近な人々の体験談などによって生まれているものである。さらには、朝鮮学校に対する日本政府の圧迫や韓国政府の民族消極的な態度とは対照的に、朝鮮が、朝鮮学校に1957年から教育援助費・奨学金として財政的支援を続けてきたことも事実である。現在でもその額は減ったが、それでも、毎年、滞ることなく、お金は送られてくる。財政的に非常に危機的な状況で学校運営を行っている朝鮮学校にとっては、ありがたいものであろう。そのことは、生徒たちにも「感謝の物語」として繰り返し伝えられ、生徒たちにとっても大事な朝鮮学校を支えてくれる〈祖国〉（＝朝鮮）としての親愛の念が生まれるのであろう。高2の時に、最初の教育援助費を経験した人は次のように当時の思いを話す。

「嬉しかったね。あのときは。（僕は）高校2年だった。嬉しかったね。いや一國ってありがたいなあって。信頼っていうかね。ちゃんと見届けてくれるっていうね。（私：国というのは北側のことですか？）そうですね。送ってくれた人にありがとうって言いたいから」（1940年生、男性・2世）

実際、1957年以降、朝鮮から送られた教育援助費で学校の施設が整備され、1970年代には学校の運営費の6割から7割をしめていたとも言われている。この教育援助費により、在日朝鮮人たちは日本にいながらも、〈祖国〉＝朝鮮に守られているのだという実感をもつことにつながったのだ。特に、当時の朝鮮は朝鮮戦争が休戦になってまだ4年目。朝鮮の国土はことごとく破壊され、朝鮮も国家建設で大変な時期だったはずである。そうした中で、金日成の「工場ひとつ建てられなくても、日本にいる子どもたちにお金を送らなければなりません」というメッセージは、当時の在日朝鮮人たちには大きな力となったという。そして、それは、世代を超えて語りつがれ、今日にも受け継がれている。2010年度に朝高を卒業した女性は次のように語る。

「やっぱり、ウリハッキョの歴史が教育援助費から始まっているんで。そういう面では本当に感謝してもしきれないって言うか。自分が習えるところが存在すること自体がウリナラのおかげなので、それは本当にそ

ういうこと踏まえたら、本当にウリナラの一員として見てもらっていることはすごいことだなあという思いはありますし。」(1992年生、4世・女性)

ところで、この教育援助費について「しょせん在日朝鮮人たちが送ったお金」という言説が日本では根強く存在する。私も、学会や研究会で発表するたびに、このようなコメントを受ける。しかしながら、たとえば、この教育援助費の出所が在日朝鮮人たちの寄付であっても、本国を経由して送られてきたことは事実であり、また、少なくとも、韓国を支持していた在日朝鮮人たちには、朝鮮学校を支援する人はほとんどなかったことから、このような言説をもって、朝鮮学校に関わる人たちの朝鮮への感謝の気持ちを否定するのは的外れではないだろうか。少なくとも、朝鮮は朝鮮の立場に即して、朝鮮学校を有形無形で支援してきたことは事実であり、そのことの意味は、在日朝鮮人たちと朝鮮学校が日本社会でおかれてきた状況と歴史の中で理解すべきことであろう。日本社会の「感覚」と「常識」で、在日朝鮮人たちの朝鮮への感謝の気持ちを皮相的にコメントすることが、結果としては、単なる「揶揄」にすぎないことに自覚的になるべきであろう。

ともかく、朝鮮学校関係者にとっては、朝鮮は感謝すべき〈祖国〉であり、そこへの訪問は、感激と感動で満ちたものになるようである。したがって、〈祖国〉の第一歩を右足で降りるか、左足で降りるかという「悩み」は、朝鮮学校生でも伝統になり、歌にもなって朝鮮学校で歌われている。その歌詞の内容は「左足から降りようか、右足から降りようか、祖国を初めて訪ねたら、涙がさきに祖国に降りた」(“왼발로 디딜거냐 오른발로 디딜거냐” 1987年) というものである。

1981年に初めて朝鮮を訪ねた女性はその時のことを振り返って次のように語る。

「初めて共和国を訪問したのは1981年で、21歳のときなんだけど、やっぱり民族教育を受けてきたし、総聯の仕事をしてきたので、北が祖国って、私としては(考えてきました)。船で元山に降りるときに、右(足)で降りるか、左(足)で降りるか、裸足で降りようか、みたいな(ことをみんなで話した)。」(1960年生、女性・3世)

そして、このような「儀式」は今でも続いている。前述の歌が作られた頃、また、上述のインタビュー対象者が訪朝したときには、船での朝鮮入りだったが、今で

は、空路での平壤入りを余儀なくされている。しかし、それでも、飛行機のタラップを降りる時、生徒たちの多くは、楽しそうに、両足で飛び降りて、朝鮮での第一歩を踏みしめるのである。

そして、朝鮮への入国手続きをした途端に、現地の指導員たちの歓迎を受け、バスに乗り込み、その中でも早速、指導員とともに「パンガップスムニダ」(「반갑습니다」=お会いできてうれしいです)という歌を歌いながら、ホテルに向かう。そして、ホテルでも従業員たちによる歓迎の歌とアーチに迎えられ、朝鮮の初日を迎えるのである。

その後の2週間は、前述したように、多くのプログラムをこなしつつ、各参観地や訪問先で現地の人たちとの交流を経験し、朝鮮の現状を生徒たち自身の五感を働かせて経験することになるのだ。

訪問期間の半ばには、生徒たちの緊張も解けて、実へのびのびとした表情でプログラムをこなすようになる。指導員たちやホテルの従業員とも親しげに話をするようになる。現地の人々が話す朝鮮語も耳に慣れて聞き取りやすくなることが一因だろう。コミュニケーションがスムーズになるにつれて、現地の人との距離も近くなっていくのは当然のことだ。そして、訪問の終盤には、現地の指導員やホテルの従業員ともすっかり打ち解け、指導員からのまじめな指導の合間には冗談を言い合って笑っている姿も頻繁に目にするようになる。

指導員のほか、ホテルの従業員たちも実によく生徒たちの世話をする。特に「チュン(層)オモニ」と呼ばれる各階にいる客室の担当の女性たちは、まるで、自分の子どもの世話をするかのようには生徒たちに話しかけている。部屋の清掃で生徒たちの部屋に入れば、不便はないかと聞き、洗濯物を出すように働きかけ(生徒たちの洗濯代は無料)、また、体調が悪い生徒がいれば心配をし、生徒たちがプログラムを終えて戻ってくれば、一日どうだったかと尋ねている。まさに「オモニ(母)」と呼ばれるのがぴったりくるのである。他にも、各階にある喫茶店や売店の従業員を生徒たちは「オンニ・ヌナ(お姉さん)」と呼び、雑談をしながら、飲み物を飲んだり、買い物をしている。少し年齢が上の従業員は、母親気分も半ばあるのか、たとえば、私が生徒たちのジュース代を支払うと、「みんな、先生が払ってくれましたよ。お礼を言いなさい」などと促すシーンもある。

さらには、食堂では、食堂の従業員が生徒たちに、どんなものが食べたいか、好きなものは何かなどを聞き、2週間、食事に不便がないように心がけている様子も見ることができる。ご飯、スープ、おかずなどのお代わり

も、生徒たちは自由だ。

〈祖国訪問〉から戻った生徒たちが、「祖国の愛」という言葉を使って朝鮮の良さを語るが、それは、上述のような何気ない日常的な現地の人たちの気遣いをさしているのであろう。「祖国の愛」という言葉は、いささか大げさなものに聞こえるかもしれないが、朝鮮学校学生への朝鮮での待遇は「破格」であることは事実であり、生徒たちの滞在費用の多くを朝鮮が国家負担しているのだ。生徒たちは、朝鮮(=〈祖国〉)が朝鮮学校を支援し続けてきたこととの延長線上に、朝鮮学校の生徒たちの〈祖国訪問〉を援助してくれていると理解するようだ。それを生徒たちは「祖国の愛」として捉え、再度、感謝の気持ちを抱くように思われる。

2 生徒たちの変化

生徒たちの最初の変化は「朝鮮へのイメージが変わった」というものである。これまで何度も述べてきたように、生徒たちは基本的には朝鮮に対する愛着は持っている。また、学校でも朝鮮に関する教育は受けてきている。しかしながら、同時に、生徒たちは日本の情報に囲まれて生活をしている。したがって、「学校ではいい事言っているけれど、実際はどうなのかな？」という疑問は拭えずにいたという生徒たちは多い。同行調査中の生徒たちの声をフィールドノートから拾ってみよう。ところで、朝鮮滞在中、私は、生徒たちとは基本的には朝鮮語での会話を心がけた。朝鮮滞在中の原則は「ウリマル100%」であるため、外部者である私が日本語で話すことによって、その原則を壊すのは申し訳ないという気持ちが先立つからだ。したがって、元は朝鮮語で話された会話が多い。ただし、生徒たちは部屋に戻ると、生徒同士は日本語で会話をし、教員が入ってくると見事に朝鮮語にスイッチする様子は見ていて興味深かった。

「やっぱりテレビなんか見ると、変な国みたいなこと言っているし。どっちなんだろうって思っていました。」(2013年同行調査 男子)

「(朝鮮に)来てよかったです。前? うーん、興味はあったけれど、こんな高いお金払ってまで来る価値があるのかな。修学旅行ならば日本でもいいじゃんって思ったりもしていました。だって、日本でテレビ見ていると、あんまり面白そうな国じゃなさそうだから。なんか、独裁っていう感じで、軍隊しかテレビに映らないし。でも先輩らは楽しいっていうから、何が本当かなって思って。」(2014年同行調査 女子)

しかしながら、滞在中、日本のマスメディアが決して報道しない朝鮮の日常を見て、生徒たちは言う。

「バスの中から、道を歩いている人たちに手を振ると、みんなニコニコして手を振ってくれます。日本のテレビみていると、朝鮮の人はみんな暗い顔して、歩いているみたいじゃないですか。でも、赤ちゃん、抱っこして歩いている人の様子とか、勉強しながら道を歩いて学校へ行く小学生とか、素朴な雰囲気がいいですよ。」(2015年同行調査 女子)

「先生、ウリナラって、すごいですよね。(私:何がすごいのか?) 思ったより、ずっと発展している。なんか、テレビ見ていると、貧乏っていうか、人が飢えているっていうことばかり言っているけれど、平壤見ると、結構発展しているし。これ(金策工業大学の電子図書館)、日本でもなかなかないですよ。そりゃ、日本と比べたらまだまだだけど、でも、ウリナラ、頑張っていると思いませんか?」(2013年同行調査 男子)

このように、まず生徒たちは、自分たちが直接見て、聞いて、感じる朝鮮を経験することにより、日本で報道される朝鮮のイメージと、学校や教科書また身近な人たちから聞く朝鮮のイメージとのギャップを解消していく。そして、日本で流され、作られる朝鮮のイメージがいかにも歪んでいるものかを実感していくようだ。

さらに、日程をこなしていくうちに、生徒たちの変化が目に見えてわかるように見える。「しっかりしていく」としか言いようがない変化である。そして、これは私一人が感じる印象ではないようだ。本人たちも振り返って次のように語る。

「ウリナラで過ごしてたら、すごい変わるんですね、みんな。やっぱり自分の民族の中で暮らして、いつもなんか、どっちかというグレてる子たちも、ちゃんと並べよみたいな感じの声、かけてたりとか、すごいびっくりすることが多かったんですよ。自覚を持って、みんな。ウリナラで過ごすことによって、チョンサム(朝鮮人)としての自尊心っていうか、そういうのをちょっとずつでも、持ち始めてるんだろうなあっていうのを感じ始めて。もちろん、日本に帰ったら、弛んじゃうってのもあるんですけど……。」(1992年生、女性・4世)

「ウリナラの人の純粹さに僕らまで感化されるっていうか。あの人たちに、僕らはだらしないうって思われたくないっていうか。だから、みんな、不思議にしっかりしますよね。背筋もまっすぐに伸びるっていうかね。」(1992年生、男性・4世)

また、引率の教員も同じように感じるようだ。次に引用するのは、大阪朝高の引率教員の言葉である。2015年7月の大阪朝高〈祖国訪問〉から戻っての感想である。

「生徒たちが成長したのが一番です。祖国の地で同胞と触れ合い、気兼ねなくチョゴリを着て大きな声でウリノレ(朝鮮の歌)を歌う、そういった生活を2週間もすると生徒たちは精神が開放されどどん素直に、正直に、そして真面目になっていきます。不思議と。そして、生徒たちにとって自身の存在について深め、朝鮮人として人生観を見つめなおす期間になっていきます。生徒たちの変化には、(私)自身8回目の引率ながらやはり毎回感銘を受けます。」(大阪朝高教員から私あてへのメール 2015年8月3日付)

生徒たちの内面に変化をもたらすものは何か。それは、朝鮮の人たちとの出会いのようである。滞在中のプログラムの中で、生徒たちが最も心に残ったと言うのは、やはり、人との交流プログラムである。姉妹校訪問をはじめとする様々な交流プログラムがあるが、それらを通じて、生徒たちは、同年代の若者たちと交流する機会を持つ。食事やおやつをともしながら、話をし、一緒に歌を歌い、踊りを踊るといった時間を過ごすのだ。一見、単なる楽しいだけの時間であるが、生徒たちは、同年代の若者たちとの対話を通じて、多くのことを考えるようである。たとえば、「私にも夢がありました。本当は科学者になりたかった。しかし、国家建設のために、人民軍にはいろうと思います」と語るのを聞いて、生徒たちは「自分は何をしているんだろう」と考えてしまったという。交流会から戻ってきた一人の女生徒は、ホテル内の喫茶店で話をしていた私と私の案内員を見つけて、席に座り込み、次のように語った。

「先生、あの人たち、見方によっては、メッチャ洗脳されていますよ。国のために闘う、国を守るって、20歳のオンニ(お姉さん)が言うですから。怖いなとも思いました。でも、考えてしまいました。そう言わなければならない現実があって、あのオンニは、まじめ

に考えている。私ってこれでいいのかなって思いました。私もずっとウリハッキョに通ってきていて、そういう私が、ただただ、自分の夢だけをおいにかけていいのかなって思いました。でも、『ああ、そんなこと考えたらダメ。自分の道を進めばいい』って思う自分もいるんです。先生、どう思います?」(2014年同行調査 女子)

こう語った彼女は、決して「優等生」タイプの生徒ではない。学校内の役員をやっている訳でもなく、当時の進路希望は、日本の大学に進学して経済学でも勉強しようかなというものだった。「なぜ経済学をやりたいの?」という質問に対しては「お金がもうかりそうだから」と答えるような生徒だった。しかしながら、同世代の朝鮮人との交流は、それまでの人生観を変えるものだったようだ。しばらく、私たちの席にそのまま座って「私たちが祖国のためにできることって、よくわからない。でも(在日朝鮮人の)同胞社会を守っていくことはできるかもしれない。それって、朝大(朝鮮大学校)へ行かないとできないのかなあ? 日本の大学へ行ってもできることがあるような気がするし。ああ、わからない。」と独り言のように話し続けていた。

この女子生徒が特異なケースではない。多くの生徒たちが、朝鮮にいる間に自分の進路を真剣に考える。こんなエピソードもある。2013年同行調査で生徒たちと白頭山を下山していると、一人の女生徒が「先生、同胞社会のために生きるってどういうことだと思いますか?」と話しかけてきた。そして、そのまま問わず語りのようにその生徒は話し続けた。

「トンム(友だち)たちは〈祖国〉に来て、朝大へ行くって言い始めた。朝大へ行って、同胞社会を守っていくって。私はずっと日本の大学に行こうと思っていて、でも、トンムたちからその学部ならば朝大にもあるって言われて。それもそうなんです。朝大へ行くことだけが同胞社会を守ることなんですかね? 日本の大学へ行っても、私が同胞社会のためにできることってきつとありますよね。」(2013年同行調査 女子)

私は彼女の問いかけに正面から答えることをしなかったが、彼女は訪問最終日、宿泊した平壤ホテル主催の歓送会で生徒たちが歌って踊っている時にも、私の席に来て、同じような問いかけを私に続けていた。「日本の大学でも朝大でもできることがあると思うよ」という私の一言に対して、「そうは思うんです。でも、〈祖国〉に来

て、人民たちが一生懸命なのを見ると、もっと直接的に同胞社会のために何かしないといけないかなって。今日も姉妹校で『これからもずっと朝鮮人としてしっかり生きていってください。お互いに祖国のために頑張ろう』って言われて」と話していた。

また、別の卒業生（1995年生・男）も当時を振り返って「一瞬ですが、朝大に行く方がいいのかなと考えましたよ。雰囲気もそう思わせるのかもしれませんが、でも、祖国とつながっているためには、朝大の方が確実だとも思いました。まあ、受験勉強を始めていたので、そこから逃げるみたいに思われるのもイヤだったので、結局、日本の大学に進学したんですけど」（2013年同行調査）と話してくれた。

また、愛知朝高から朝鮮大学校に進み、卒業後の現在は総聯のある関連機関で働く23歳の青年は次のように語った。

「高校での〈祖国訪問〉はね、朝鮮を感動するっていうか。（私：感動したの？）感動しました。そりゃあ、日本のメディアと全然ちがうっていうのがありましたね。朝鮮学校でも、（朝鮮のこと）習いますけれど、やっぱり（直接）知る機会だったっていうのが大きい。（行くまでは、指導者に）『マンセー！ マンセー！』（万歳、万歳）と言っている人民に対して、僕は『いや、ありえん！』って。不信感っていうか、『独裁じゃん。ダメじゃん』っていう気持ちはありました。でも、人民を見ていると、心から尊敬している何かがあるんだなあっていうのを（感じた）。それが何かっていうのは、その時はわかりませんでしたけれど、でも、ああ、ここが朝鮮って国なんだっていうのは、はい、感じました。人がこうして生きているんだって。朝鮮の人の暮らしはこういうのなんだって思った。純粋に信念持って生きているっていうのが分かりました。それで、僕は、夜、友だちの討論を通じて、自分の進路を真剣に考えました。僕は当時はある資格を目指そうと思っていて、その資格を活かして、朝鮮人として在日社会のために生きていくっていうことがはっきり決まりましたね。」（1992年生、男性・4世）

このように生徒たちは、現地の人々、特に同年代の人たちとの出会い、その後の生徒たち同士の討論を経て、自分の進路について真剣に考える時間を持つようである。日本とは大きく異なる国家/政治/社会体制下で、若い朝鮮の人々が、真剣に自分と国家との関係の中で、自

分の進路を考えている姿に生徒たちは強く影響されるようだ。そして、「朝鮮人である自分」「日本でも朝鮮人として生きていくこと」「日本にいても〈祖国〉とつながっている自分の自覚」など、それまで朝鮮学校の教育の中で自明視されてきた「朝鮮人であること」を改めて考える機会をもつことになるようである。

まだ17-18歳の多感な年代の生徒たちは、朝鮮の若者たちの生き方に感銘も受け、あまり物質的な豊かさを追求していないように見える朝鮮の若者たちの生き方を感じ、人生において幸福とは何かを一度は考えてみるようである。そして、おそらく再会は難しいことはお互いに知りつつ、「また会おう」と約束をして別れる。

姉妹校でも食事会が終わり、生徒たちがバスに乗り込むと、朝鮮の生徒たちがバスの外から握手や指切りを求め、「絶対にまた会いましょう」「生きる場所は違っても、朝鮮人として一緒に頑張りましょう」と声をかけている。そして、バスが動き始めるとグラウンドの真ん中を駆け抜け、バスを追いかけ、いつまでも手を振り続ける現地の生徒たち、それに対して、身を乗り出して応える朝高生たち。短時間でも心の交流があったことがわかるのである。これだけネットが発達し、国境を越えてSNSなどで簡単に連絡がとれる現在でも、朝鮮の若者とはそれができないこと、そして、この出会いが一期一会であることを、お互いが知っているからこそ、余計に、その直接的な出会いが濃密な思い出になるようにも思われる。

〈祖国〉ということ——「なぜ、〈祖国〉だと感じるの？」

ところで、これまで、私が実施してきた在日朝鮮人の生活史調査では、多くの人が韓国へ行った経験話を話してくれた。渡航の目的は仕事や親戚訪問、または単なる観光など、様々であるが、その感想の多くは「韓国は外国だった」「韓国人は在日のことなど何も知らない。日本人でしょと何度も言われた」「結局、自分にとって、日本も韓国も外国でしかないってことを思い知った」という否定的なニュアンスをこめたものだった。関係研の調査では、1993-1997年の第1次調査と2009-2011年の第2次調査の間に日本国籍への帰化を選択した人がいた（V3・1950年生、女性・2世）。彼女は、その理由を、「韓国に行って、韓国語もしゃべられへんあんたは日本人やと言われた」ことだと言う。そして、日本国籍をとったことで、自分は「借家から持ち家」に住んでいるような気持ちになったと語った。

このような感想や反応は、在日朝鮮人に関わる研究をしている研究者にとって、おそらく「なじみ」でかつ

「理解しやすい」ものである。在日朝鮮人の世代が3世、4世になり、日本での生活が自明のものになり、在日朝鮮人の多くは朝鮮語ができない。家庭内での民族的な文化の継承はあるものの、それ以外では民族的なものから隔絶された生活を送っていることを考えると「韓国が外国に感じた」というのは、至極当然のことに思われる。また、韓国人の多くが在日朝鮮人に対する理解や知識がないため、在日朝鮮人のことを「日本人」としてみなすことも、ある意味では無理がないことにも思われる。

しかしながら、朝高の生徒たちの多くは、朝鮮を〈祖国〉だと感じたと言明する。もちろん、「朝鮮にずっと住めるかと言われると、それは無理です」(2013年同行調査 男子)「住むのは日本がいいです。でも〈祖国〉もいいですね。」(2012年一部同行調査 男子)などと率直な感想を述べつつ、「朝鮮はいい。やっぱり〈祖国〉です」と語るのである。

このことを、どう理解したらいいのだろうか？ この問題は、私の研究の核心的な問いでもあり、いまだ、考察の途中である。しかしながら、これまでの調査研究から見えてきたことは、在日朝鮮人に対する日本社会の無理解と朝鮮での「歓迎」ぶりのギャップから生まれる感情ではないかということである。

朝高の生徒たちは言う。

「平壤をバスで走っているとき、フト思ったんです。ああ、ここにいる人は俺と一緒に朝鮮人だって。そう思うと不思議な気持ちになったんです。ここでは俺は朝鮮人だぞ！って言わなくても朝鮮人でいられると思うと気楽になったんです。」(2014年同行調査 男子)

「朝鮮では自分を説明する必要がない。みんな、私たちのことを一応は知ってくれている。日本から来たけれど、でも朝鮮人で、植民地の結果、私たちがいるってこと。日本では、私たちのこと、説明するの面倒だから、ごまかすけれど、ここではその必要がない。」(2015年同行調査 女子)

また、韓国と朝鮮での受け入れられ方の違いを通じて、朝鮮が懐かしく感じたと言語卒業生たちもいる。たとえば、愛知朝高を卒業して、今は韓国で大企業の通訳として働く女性は次のように言う。

「ウリナラで行くところ、行くところで『在日朝鮮人学生のみなさん、〈祖国〉へようこそ。日本では苦勞していると思います、ここはみなさんの〈祖国〉で

す。歓迎します』なんて言われたら、コロってきちゃいますよね。今、大人になって、大学院から韓国に来て、生活すると、私たちのことをよく知っている人だけにウリナラでは会ったんだってわかるけれど、でも、それでも、ウリナラで大事にされた思い出っていうのは変わらない。韓国では、いっつも自分のことを説明しても、『じゃあ日本人じゃん』とか、ウリハッキョの話ですれば『じゃあ、あなたは総連系の人で、北韓(韓国では朝鮮をこう呼ぶ)の人なの?』ってなる。日本でも韓国でも自分を説明するのが面倒だったけれど、ウリナラではそれがなかったのがすごく楽だった。」(1989年生、女性・3世)

また、現在はヨーロッパ留学中の女性も、2014年8月に韓国で行われたセミナーに参加したときのことを振り返って次のように話してくれた。

「セミナーの公用語は英語で、私も英語でウリハッキョのことを発表したんです。でも、韓国人は何のこと？って顔して、理解してくれようとしません。日本で生まれて育っているならば、日本学校でいって反応なんです。唯一、中国の朝鮮族の子がわかってくれて……。韓国人の人が私たちのことを知らないし、説明しても、冷たいので、なんかウリナラに行きたくなくなってしまったんです。日本の人たちも私たちのこと理解していないし、『朝鮮は一つ』って思ってきたのに、韓国とウリナラと人の違いにショックでした。」(1993年生、女性・4世)

さらに愛知朝高から日本の大学に進学し、その後、在日本朝鮮留学生同盟＝留学同(日本の大学等に在籍する在日朝鮮人の学生団体)の代表団で再訪朝した学生も次のように語った。

「高3でウリナラに初めて行って、もちろん、楽しかったんです。今年(2014年)、留学同の代表団で行こうって思ったのは、まずはウリナラ感覚を取り戻したかったから。それから、もう一つは、ウリナラで『外国人でない自分』がどんな感じか確かめたかった。日本の大学に行ってから、ずーっと、私は鎧を着ている感じで。朝鮮人であることを意識して、頑張っているっていうか。それはウリハッキョではなかったですからね。だから、代表団で行くことを決めたときに『自分の国に住む』っていう感覚はどんな感じなんだろうって考えていて。だから、もう一回行こうっ

て。それで、平壤ついて、バスに乗って、空港から平壤市内に向かっていているときに、人民とか木とか田んぼとか見て、すっごく気持ちが楽になったのを感じたんです。なんかどう言えばいいのかわからないけれど、とにかく、『ああ、ウリナラに来た』って思ったです。先生(=私)には、その感覚はないですよ？(私：うん。私にも平壤で会いたい人はたくさんできたから、行くのは、うれしいけれど、気持ちが楽になるという感覚はないね。)ですよ？ だから、先生は日本人だから日本で住んでいても、肩に力をいれないでいいんですよ、きっと。私はウリハッキョにいるときにはよく分からなかったけど、日本の大学に行って、『朝鮮』って言葉が出るだけで構えている。本名で行っているけれど、高校の話になると、なんか、その話には加わらない。逃げてくるかもしれんけれど、傷つきたくないから。でも、そうしていることで、やっぱり傷ついているんですよ。(1993年生、女性・4世)

このように、朝鮮を〈祖国〉だと感じたという理由を「自分を説明する必要がない気楽さ」「在日朝鮮人である自分を受けとめてもらえた」「在日朝鮮人としての自分たちを温かく歓迎してくれた」などと説明する。そして、はじめて訪問した朝鮮で「ここが〈祖国〉だ」と感じ、そして居心地の良さを感じているのである。これは、すなわち、日本社会の在日朝鮮人に対する処遇の悪さを逆照射しているのではないだろうか。前節までで朝鮮学校(=「安全な家」)で守られて教育を受けているからこそ、自らの民族をまっすぐに受けとめることができると論じてきた。言い換えれば、生徒たちは、直接的な差別体験は少ないだろう(近年、ネット上でも街頭でも朝鮮人をターゲットにした露骨な差別=ヘイトスピーチの横行はあることは指摘しておかねばならない)。しかしながら、日本の在日朝鮮人に対する差別的なまなざしを感じながら生活しているのだ。朝鮮学校裁判の意見陳述でも原告番号2番が次のように述べている。

「現在の日本の環境、マスメディアの共和国のバッシングは周囲の差別的な視線の中で在日朝鮮人としてのアイデンティティを確立していくと同時に、在日朝鮮人としての誇りを持ちながら生きていくのは思った以上に難しいことだということを実感するようになりました。」(『とり通信』7号)

日本社会の差別的なまなざしを日常で感じているから

こそ、「同胞」として温かく迎え入れてくれる朝鮮で感動するのではないだろうか。

「ぎゅっと抱きしめてくれる感覚。だから祖国なんです。」

これは、日本の学校で大学まで教育をうけ、在日韓国民主統一連合という民族団体で活動し、9回の訪朝経験がある小説家の黄英治氏(1956年生、男性・2世)の言葉である。この言葉に全てが集約されているようにも思われる。

ところで、このような記述、分析に必ずついてまわる否定的なコメントがある。それは、「朝鮮はいいところしか見せない」「必ず監視(指導員や案内員のことを指す)がいて、24時間行動を監視している。だから、生徒たちは本当にうわべだけしか見ていない」「朝鮮の人権状況の悪さを無視して、それを見ることなく、〈祖国〉だと思わせるのは『洗脳』でしかない」等々。私自身も学会報告や研究会報告で何度も経験してきたコメントである。

生徒たちも同様であり、また、かれらもどこかで冷静である。常に指導員とともに行動し、海外同胞として、朝鮮国内には訪問できないところもある。また、朝鮮側の指導の意図は前項で述べた通り、明確に朝鮮を朝鮮の立場で理解させたいというものである。生徒たちは否定的なコメントを受けたときには「そういう側面があるのは否定しませんよ」と言う。本人たちもわかっているのだ。自分たちが会える人、見るものは、どこか制限されたものであることは。しかし、同時に、私に語りかけてくる。

「でも、先生、先生も一緒にいたら分かりますよね。人民たちが僕らに嘘言っているんじゃないってことを。人民たちは僕らを本当に歓迎しているし、そして、僕らに真剣に一緒に頑張って祖国のために生きていこうって語りかけているって。あの目をみればわかるんです。誰かに指示されているんじゃない。」(2013年同行調査 男子)

「姉妹校でお別れの時にお互いに流した涙は演技じゃないですよ。私は本気だったし、祖国の学生らも演技で泣いてはいないですよ。お互いにぐっと感じるものがあつたんです。」(2015年同行調査女子)

また、たとえ朝鮮側の意図が「朝鮮の良い部分を見せ

たい」というものであっても、朝鮮の現実の厳しさは、移動中のバスの中から容易に垣間見ることできる。確かに、私の初訪朝以来4年の間にも、平壤市内は発展し、新しい建物がどんどん完成している。また、再開発もすすみ、古いアパートの建て替えも進んでいる。車の数も顕著に増えていることは実感できるし、渋滞が発生するのもそれほど遠いことでないようにも思われる。また、携帯電話もいつの間にかほとんどの人がスマートフォンを持つようになり、社会人はもちろん、高校生から大学生くらいのも若者もみなスマートフォンを片手に町を歩いている。愛知朝高の姉妹校で朝高生が芸術公演している最中、現地の生徒たちはほぼ一斉にスマートフォンを取り出し、動画を撮っていた。その姿は日本の若者たちと何も変わらなかった。しかし、一方で、電力不足から建設現場や農作業はほとんどを人海戦術でこなしている。灌漑技術の不足や農業に適さない土地のせい、農繁期には、学生から幹部までが援農として農村支援に動員され、なんとか食料問題を解決しようとしていると言う。また、平壤から一歩外にでるだけでインフラ整備の遅れは簡単に感じる事ができる。これらのことに生徒が気づかないはずがないのである。しかし、生徒たちは言う。

「人民の生活はまだまだ大変そうだけど、でも、がんばっている。」(2013年同行調査 男子)

「僕たちはホテルのお湯がでないことで、つい不満をもってしまったけれど、人民たちは、水すら決まった時間にしかでないと言う。でも、それに文句を言うんじゃないくて、『今、自分たちは頑張っているから、いつか生活は向上する』って言いました。『豊かさ』って何かなって思いました。先生、ここ(朝鮮)の人は貧しいけれど、美しいと思いませんか?」(2014年同行調査 男子)

つまり、日本のメディアが流す事象と同じものを生徒たちは見ても、それに対する見方や評価が異なっているのである。日本で形成された「北朝鮮」イメージでこれらの語りを聞いても、理解は困難かもしれない。しかしながら、朝鮮を他の国々と同列のものとして考えれば、たとえば、2週間の訪問で、その国のこと、社会のこと、すべてはわからないだろうし、その旅にガイドがつけば、その国や社会の良いところ、美しいところを紹介しようとするのはごく当たり前のことではないだろうか。日本のメディアが報道する朝鮮のネガティブなこと

も一部の事実であろう。しかし同時に、生徒たちが(そして私自身が)見て、聞いて、経験した朝鮮、そして、実際に会って、一緒に話し、食事をし、歌ったり、踊ったりした現地の朝鮮人の姿もまた事実なのである。「朝鮮で見るもの、すべてがフィクションだ」と決めつけること自体の「暴力」に自覚的になるべきである。

さらに、生徒たちの中には朝鮮に対して強い違和感を表明するものもある。それは、指導者に対する距離や生活感覚の違いに対するものである。

「ウリナラのことを心底イヤだって思った訳ではないんです。でも、指導者の偉大性を何度も強調されるじゃないですか、どこへ行っても。それに対して、理解できないっていう子もいました。で、夜の討論で、向こうの指導員に直でそれを言った子もいるんです。そしたら、指導員の先生、そっから4時間ですよ。先生との話し合い。指導員の先生、ガチの真剣勝負で僕らに挑んできたというか。もちろん、その4時間じゃ、僕らは完全には変わりません。でも、僕は、向こうが主張することもわかったっていうか。あそこが指導者の偉大性を言うのも理解できるんです。でも、同時に、わからないって言った子の気持ちもわかる。両方わかります。」(2013年同行調査 男子)

「姉妹校に行ったときに、向こうの子が私たちを歓迎して、手をつないでくれたり、一緒に歌を歌ったり、ダンスをしたりするのは、実は、内心みんな辛いんです。私たちのノリではないから。(私:でも、みんな楽しそうにみえたよ。)やっているうちに楽しくはなるんですが、最初は、頑張って手をつないで、歌って、踊るんです。それは、私たちの『意地』なんです。歓迎してくれているのが分かるから、それに応えないといけないって。私たちも相当気を使うんです。」(2014年同行調査 女子)

「中には『日本に帰りたい』ってずっと言っている子もいてから、私はまとめ役でもあったので、どうしようかって思ったりしていました。(私:なぜ帰りたいの?)それは色々あると思うんですが、2週間、ずっとトンム(友だち)たちと一緒にですから、それが楽しいのは事実ですが、でも、やっぱり一人になりたい時もありますよね。あと、食事が合わないとか、日本と比べれば、そりゃ、色々(生活環境の質は)落ちますし。そういうのに慣れないトンムはいました。でも、みんな、毎晩話し合って、『自分たちが育て

きた日本の価値観だけでウリナラを見るのはやめよう』って何度も話して。その子も日本に戻ってから、『行ってよかった』って言ってくれたんで、よかったんですけど。」(1992年生、女性・4世)

生徒たちはこのように様々なレベルで葛藤を経験しながら2週間を過ごすのである。同級生、朝高の教員、そして、現地の指導員も交えての討論も繰り返される。このような時間を過ごす中で、生徒たちは生徒たちなりの朝鮮観を形成していくのだ。それは、決して盲目的なものではない。そのことは、次にあげるかれらの語りをみれば、明白だろう。これらの声を聞いて、朝鮮学校や朝鮮への〈祖国訪問〉の営みのある一部だけを表面的にとりあげて、「洗脳教育」「プロパガンダ」等の評価を下すことの過ちを感じないだろうか。生徒たちが生きている社会は日本社会である。その中で、様々な情報を受けとり、同時に学校やそして〈祖国訪問〉で別の角度・視点からの情報を受けており、それらを総合的に判断して、個々人が、自分にとっての〈祖国〉とは何かということを考えていることを理解してほしい。

「僕ら、実物(朝鮮)を見てるんで。(日本の朝鮮報道を見て)そう思うだろうなっていう部分は、実際、あるっちゃあ、あるんで。全否定ではなくて、ただ、それを違う、違うだけじゃなくて、そういう意見があるけども、これはこういう意図があって、みたいな、そういう自分なりの見解は(ある)。(学校での教育は)基本、いい部分だけを入れるんで。だけど、それだけじゃないだろうし、その裏で何があるのか分かんないですけど。でも(良い部分だけを)教えないと、どんどんマイナスイメージが増えてきますから、この日本では。そうなっちゃうのは当然なんです。」(1992年生、男性・4世)

「無償化とか補助金とかの問題で、日本の報道みていると、まるで僕らが何にも考えずに、ただ『指導者に忠誠を誓った』みたいに言うじゃないですか。そりゃ、あの場(朝鮮)では、そういうことを言うこともあります。でもね、朝鮮学校で僕らが学べるのは、やっぱりウリナラのおかげなんです。それに対しても色々言う人いますけどね、でも、ずっと助けてくれたし、僕らがウリナラ行けば、大歓迎してくれるんです。だから、僕らは僕らなりに、いろいろ考えて、迷って、言っているんです。日本の人が、なぜ朝鮮の人がああいう風にね、指導者を尊敬するのかってことを少しも

考えずに、ただただ『洗脳』っていうのは頭にきまず。色々と問題があるのはわかっています。バスに乗っていけば、地方に行けば、ウリナラが大変だってわかりますよ。停電だって時々おきるし、地方へ行けばトイレは『ポットン』で汚いし。平壤で水洗トイレでも水が流れないから余計に汚いなんてこともあります。そういうことだけみても、ウリナラは100点ではない。政治的にも色々言われるけれど、きっと僕らにはわからないイヤなことたくさんあると思いますよ。強制収容所だとか粛正の問題とか、日本の報道が言うのももしかしたら本当かもしれないってわかっています。でも、ひどいのはウリナラだけじゃないでしょう。日本もアメリカもイギリスも、他の国もみんなひどいじゃないですか。ウリナラだけ、100点じゃないから0点だみたいな(ことを言う)。日本がウリナラのことを悪く言えば言うほど、僕はウリナラピョン(朝鮮の味方)になっていく。僕らだって、ウリナラで聞いたことや学校で言っていることを全部鵜呑みにするほどバカじゃないですよ。でも、少なくとも、僕らはウリナラに行って、ウリナラの人らに会って、話をしている。道を歩いている人もいっぱい見ている。その上で、僕らは僕らなりのウリナラをつかんでいるんです。」(1992年生、男性・4世)

まとめにかえて——在日朝鮮人と民族・〈祖国〉・ナショナリズム

本稿では、まず、愛知中高におけるフィールドワーク、朝鮮学校関係者へのインタビューから、当事者にとっての朝鮮学校の意味を描き出してみた。

朝鮮学校では、朝鮮語、朝鮮歴史、朝鮮地理、現代朝鮮歴史などの「民族科目」を基盤にしつつ、「朝鮮人」を育てていく。さらに、生徒たちは、幼少期から朝鮮語とともに、朝鮮舞踊や朝鮮の歌、朝鮮の楽器に触れる機会も多く、日常的に朝鮮人に囲まれて成長していくという経験を通じて、肯定的なアイデンティティを自然に培うようである。

さらに、日本政府からの過酷な弾圧にも負けずに1世たちが朝鮮学校を建ててきたことに対する感謝、そして2世たちによって学校が維持され、3世、4世の自分たちが今学ぶ場所が存在するということに感謝するという物語も、学校の中では継承されている。実際に、1世たちがお金のみならず、手作りで校舎を作ったという話は関係研で在日朝鮮人の生活史を聞いているときにも何度か出てきた。さらに2世たち(今の保護者の親世代)の中で、自営業等で成功した人たちが巨額の寄付を学校に

した、当時から給料が十分に出なかった教員たちを毎日のように家に招いて食事をさせたなどの話も頻繁に聞いた話である。それらの話は、感謝の物語であるのと同時に常に日本社会への抵抗のシンボルでもあるのだ。日本政府は何もしない、弾圧しかしてこなかった、ならば朝鮮学校は私たちだけで(우리끼리)で守り続けるのだという意識は世代を超えて受け継がれている。

こうした中で、生徒たちは強い仲間意識と帰属意識を持つようになり、また、保護者たちも朝鮮学校に通う生徒たちを学齢期前から知っていて、非常に親密な関係の中で12年(またはそれ以上)を過ごすことになる。おそらく、ある生徒にとっては煩わしく、息苦しいこと¹²⁾もあるだろうが、それでも生徒たちは「守られた空間」(Safe home)の中で、朝鮮人であることを否定される経験もなく成長していくことを本稿では考察した。現実には日本社会が在日朝鮮人に対して、差別のみならず、無理解、無関心であることを鑑みると、在日朝鮮人の子どもたちにとって、このような空間がいかに貴重なものであるかを、少しでも理解されればと願う。

さらに、「思想教育」「個人崇拜」「忠誠の強要」等、日本社会が批判のターゲットにしている朝鮮学校と朝鮮民主主義人民共和国との関係を、朝高3年生の生徒たちの〈祖国訪問〉体験の参与観察から描き出してみた。

朝鮮学校の保護者にしても生徒にしても、そして、おそらく現場の教員たちも、朝鮮本国に対する意見や態度は様々である。特に保護者たちは、肯定的な意見を述べる人から批判的な意見を述べる人まで様々である。それでも、保護者たちは、子どもたち自身が朝鮮本国に対してどのような距離をとるかは「子どもたちが成長の過程で自らが考えて判断すること」と考えている。

ほとんどの生徒たちが、高3で初めて訪問する〈祖国〉＝朝鮮で、それまで教科書だけで学んできた様々な施設や史跡を訪問し、そして、現地で同年代の朝鮮人学生を中心に交流し、自分たちなりの「朝鮮観」(＝「祖国観」)を形成することを、現地での同行調査の記録から描き出してみた。生徒たちが自分たちの五感を働かせて、生徒たち自身の言葉を借りれば「〈祖国〉をつかむ」ように、悩み、考え、もがいている姿が伝わっただろうか？

日本社会が皮相的に批判するように、朝高の〈祖国訪問〉は単なる「プロパンガンダ」旅行ではないし、生徒たちはそこで単に「洗脳された」者たちではないのである。朝鮮で様々な葛藤、矛盾を感じながらも、それでも、自分たちを「同胞として」大歓迎する朝鮮の人たちの姿を肌で感じる中で、朝鮮が自分の〈祖国〉だと言

切るのである。もちろん、まだ18歳前後の若い青年たちであるから、ある意味、純粋すぎるほどに受けとめていることも否めない。今後、成長する中で、かれらの〈祖国観〉は変化する可能性はある。しかしながら、朝高生として、〈祖国〉＝朝鮮に強い愛着をもって、かれらは、朝高を卒業していくのである。

こうしたかれらなりの知的活動を、皮相的に、かつ没歴史的に批判し、朝鮮との関係性を理由に、堂々と公権力が差別(本件裁判の高校無償化からの排除がその象徴である)することの問題に自覚的になるべきではないだろうか。

なお、在日朝鮮人の歴史が100年をこえる中で、在日朝鮮人の生き方も実に多様になっている。朝鮮学校に通う在日朝鮮人の児童・生徒たちは、在日朝鮮人全体の中では1割程度だとも言われている。

在日朝鮮人にとって、朝鮮半島への帰還が非現実的となった現在、「在日を生きる」といったような「在日論」と呼ばれる立場が1970年代から在日朝鮮人社会では優勢となっている。つまり、「南も北もない」もしくは「南も北も」という立場を主張しつつ、在日朝鮮人なのだから、本国の分断を在日朝鮮人社会に持ち込むのはやめようという立場である。その文脈においては、朝鮮学校で語られる「民族」や〈祖国〉は、本質主義的で一枚岩だと、在日朝鮮人社会内部からも批判的にされることは多い。

しかし、朝鮮学校が、いまなお「民族」や〈祖国〉にこだわるのはなぜなのか？ 私たち、日本の社会学者が影響を受けてきた「西洋の知」では、民族やナショナリズムは「乗り越えるべき」ものとして捉えられてきた。また、国境を越えて移動・流動してきた人々を「ディアスポラ」と呼ぶが、欧米の研究は、ディアスポラたちが「文化の再創造」によって、民族/国家を否定し、「新しいもの」を創造してきたことを明らかにしてきた。

しかしながら、在日朝鮮人たちの現実には、いまだ、日常において、民族や国家といった問題に直接的に対峙しつつ生きざるをえない。朝鮮半島の南北分断、日本の植民地/戦後責任の未清算、「北朝鮮」嫌悪、昨今のヘイトスピーチに顕著にみられるような排斥等々、在日朝鮮人たちは、とくに、朝鮮と密接な関係をもつ朝鮮学校関係者は、日常的に民族・国家・祖国といった問題に、向き合っていることを強いられているのではないだろうか。

その意味においても、朝鮮学校が朝鮮を〈祖国〉として、一見「古くさく」みえる民族やナショナリズムを語ることは、在日朝鮮人たちの日本社会での生きる営みに

おいては、必要なものであり、それらは決して、上からの一方的な押しつけで得たものではなく、生徒たち自身が自ら能動的に獲得したものなのである。

「朝鮮学校が総聯と密接な関係にあること」「朝鮮学校が北朝鮮との関係をもっていること」に対する情緒的な社会感情にのり、朝鮮高校を無償化適用から除外すると決めた時「国民の理解を得られない」として、政府は正当化したが、本件裁判においては、ここに描きだした朝鮮学校関係者、生徒たちの声や姿を真摯に見つめ、朝鮮学校の70年にわたる民族教育の営みに公正な判決が下されることを心から願うものである。

注

- 1) 2015年までに合計161回、総額は約459億7千万円が送られたという。(『朝鮮新報』ネット版2015年4月14日付 <http://chosonsinbo.com/jp/2015/04/gyoyug2015-04-14/> 2015年9月7日閲覧)
- 2) 初級部4年生から中級部3年生までは「少年団」と呼ばれる児童会のような組織がある。少年団単位での様々な活動が学校内では展開されている。
- 3) このアイデンティティの相違について、朝鮮学校の保護者の一人が興味深いコメントをした。「僕ら、ウリハッキョ出身者の『民族』って先天性で、日本学校出身の在日朝鮮人の『民族』は後天性ですから。後天的に身に付けた人の方が意味、原理原則的にこだわる」というものだ。言い得て妙だと感じた。
- 4) 歌のタイトルは「조국의 사랑은 따사로우라」(「祖国の愛は温かい」)である。
- 5) 例えば、『朝鮮学校調査報告書』東京都、2013年11月など。以下『東京都報告書』とする。
- 6) 『東京都報告書』30頁には「『現代朝鮮歴史』(高級部)の教科書には、『敬愛する金日成主席様』、『敬愛する金正日將軍』等の記述が409頁中353回登場する」とある。
- 7) 私の友人、知人の韓国人(多くが大学教員)と話しても、「KAL爆破事件には不透明なことが多すぎる。政府が発表してきたことを信じることは難しい」と語る。このような見解は、韓国社会に一定存在しているようだ。
- 8) 2009年12月の京都朝鮮第一初級学校襲撃事件はその代表であるが、日常的にも朝鮮に関するネガティブな報道がでるたびに、学校は緊張して、集団登下校を実施する。
- 9) これを『産経新聞』は「朝鮮学校生、正恩氏に忠誠、全国選抜100人、北で歌劇披露」(2013.3.15)と批判した。この記事もひとつの契機となり、大阪府・大阪市は朝鮮学校への補助金を停止した。
- 10) 「朝青愛国号」と呼ばれるバスで、1989年に朝鮮に寄贈されたバスだと聞いている。在日朝鮮人の特に若者たちが訪朝すると、このバスで移動することが多い。すでに走行距離が50万キロ近いが、丁寧に整備を重ねられたバスである。
- 11) 2006年以降、日本は朝鮮に対して独自経済制裁を行っている。その一つが、朝鮮籍の船の往来の禁止である。それまでは万景峰号という船で生徒たちも、また親族が朝鮮にいる在日朝鮮人たちも多くの物資をもって往来していたが、今では飛行機での往来を余儀なくされているために、それも困難になっている。
- 12) 何人かの生徒は学校での「息苦しさ」を語ってくれた。朝鮮学校も「学校」であり、多種多様な人間の集まりである。中には、

集団生活にあまりなじまない、個人行動を好む生徒がいるのは当然のことである。しかしながら、そんな生徒でも、卒業後の同級会には出席し、楽しそうに同級生と歓談していたのが印象的である。

参考文献

- 板垣竜太, 2007「朝鮮学校を支えるということ」『法学セミナー』2007年7月号
- , 2008「朝鮮学校の社会学」(同志社大学社会学部社会調査報告書)
- , 2013「資料:朝鮮学校への嫌がらせ裁判に対する意見書」『評論・社会科学』同志社大学人文学会, 149-185
- ウリハッキョをつづる会, 2001『朝鮮学校ってどんなところ?』社会評論社
- 小熊英二・姜尚中編著, 2008『在日1世の記憶』集英社新書
- 小熊英二, 2013「点と点をつなぐ」『信濃毎日新聞』2013年10月15日
- 小沢有作, 1973『在日朝鮮人教育論——歴史編』亜紀書房
- 金尚均, 2007「民族的尊厳の回復としての朝鮮学校」『法学セミナー』2007年7月
- 金泰泳, 1999『アイデンティティ・ポリティクスを超えて—在日朝鮮人のエスニシティー』世界思想社
- 金漢一, 2005『朝鮮学校の青春——ボくらが暴力的だったわけ』光文社
- 京都大学教育学部比較教育学研究室, 1990『在日韓国・朝鮮人の民族意識——日本の学校に子どもを通わせている父母の調査』明石書店
- 高全恵星監修, 2007(柏崎千賀子訳)『ディアスポラとしてのコリアン——北米・東アジア・中央アジア』新幹社
- 権寅寅, 2007「帰属とアイデンティティの分化と統合」伊藤亜人・韓敬九編著『中心と周縁からみた日韓社会』慶應義塾大学出版会
- 佐藤郁哉, 1992『フィールドワーク——書を持って街に出よう』新曜社
- 宋基燦, 2012『「語られないもの」としての朝鮮学校——在日民族教育とアイデンティティ・ポリティクス』岩波書店
- 田中宏, 2013『第3版・在日外国人』(岩波新書)
- , 2013「朝鮮学校の戦後史と高校無償化」『〈教育と社会〉研究』第23号, 一橋大学〈教育と社会〉研究会
- , 2015「高校無償化法における『高等学校の課程に類する課程』に関する意見書」(大阪地方裁判所提出)
- 谷富夫編著, 2000『民族関係の結合と分離』ミネルヴァ書房
- 曹慶鎬, 2011「在日朝鮮人コミュニティにおける朝鮮学校の役割についての考察」『移民政策研究』第4号, 移民政策学会
- 朝鮮高校にも差別なく無償化適用を求めるネットワーク愛知会報『とり通信』1号~14号
- 朝鮮高校生就学支援金不支給違憲国賠訴訟弁護団, 2015「朝鮮高校生就学支援金不支給違憲国家賠償請求訴訟のご報告」(朝鮮高校にも差別なく無償化適用を求めるネットワーク愛知・2015年総会資料)
- 中島智子編, 1998『多文化教育——多様性のための教育学』明石書店
- , 2011「朝鮮学校保護者の学校選択理由——『安心できる居場所』『当たり前』を求めて」『プール学院大学研究紀要』第51号
- , 2013「朝鮮学校の2つの仕組みと日本社会」『〈教育と社会〉研究』第23号, 一橋大学〈教育と社会〉研究会

- 中村一成, 2014 『ルポ京都朝鮮学校襲撃事件〈ヘイトクライム〉に抗して』岩波書店
- 朴三石, 1997 『日本の中の朝鮮学校』朝鮮青年社
- , 2011 『教育を受ける権利と朝鮮学校——高校無償化問題から見えてきたこと』日本評論社
- 韓東賢, 2006 『チマチョゴリ制服の民族誌——その誕生と朝鮮学校の女性たち』双風舎
- 片栄泰, 2006 『九州コリアンスクール物語』海鳥社
- 裊明玉, 2013 「朝鮮高校生就学支援金不支給違憲国家賠償請求訴訟について」『人権と生活』Vol. 36, 在日本朝鮮人権協会
- 山本かほり, 2013 「朝鮮学校における『民族』の形成——A朝鮮中高級学校の参与観察から」『教育福祉論集』第61号, 愛知県立大学教育福祉学部紀要
- , 2014 「朝鮮学校のフィールドから」『ソシオロジ』179号, 関西社会学研究会
- , 2014 「朝鮮学校で学ぶということ」『移民政策研究』第6号, 移民政策学会
- , 2015 「『朝鮮高校無償化裁判』が問うていること」『在日総合誌・抗路』1号, 抗路社
- , 2015 「『北朝鮮』バッシングと朝鮮高校」平田雅巳・菊地夏野編『ナゴヤ・ピース・ストーリーズ——ほんとうの平和を地域から』風媒社
- , 2015 「質的パネル調査からみる在日朝鮮人の生活史」『社会と調査』No. 15, 社会調査協会
- Ryang, Sonia, 1997 *North Koreans in Japan: Language, Ideology and Identity*, Boulder, Co: Westview Press
(2016年以後出版されたもの)
- 呉永鎬, 2019 『朝鮮学校の教育史——脱植民地化への闘争と創造』明石書店
- 山本かほり, 2016 「多文化共生と在日朝鮮人」有田, 山本, 西原編『国際移動と移民政策』東信堂
- , 2017 「排外主義の中の朝鮮学校——ヘイトスピーチを生み出すものを考える」『移民政策研究』第9号, 移民政策学会
- , 2018 「朝鮮学校」移民政策学会設立10周年記念論集刊行実行委員会編『移民政策のフロンティア』明石書店
- , 2019 「在日朝鮮人——朝鮮学校をめぐる『闘争の歴史』から」『別冊・環』藤原書店